

東洋學報

第參拾壹卷 第一號

昭和廿二年二月

論 說

智顗の法華懺法について

つ だ さ う き ち

天台の智顗が定めた法華三昧懺儀（法華懺法）は、摩訶止觀の卷二に四種三昧の第三として説いてある半行半坐三昧の一つであつて、羅什の譯した法華經、特にその普賢菩薩勸發品と、思想上それと關係のある觀普賢菩薩行本經（普賢觀經）と、の説にもとづいたものであるといふ。法華經においてはなほ安樂行品が一つの大せつなよりどころとなつてゐるようである。また法華三昧の名は、法華經の妙音菩薩品と妙莊嚴王本事品とに見えてゐるが、たゞ名が記されてゐるのみであつて、その性質も方法も説いてはない。しかし智顗は、法華三昧の名をそこから取つたのであらう。法華三昧經といふものもあるが、これは智顗のこの懺儀の説とはさしたる關係が無いようである。

ところが、これにはいろいろの問題がある。第一には、智顗が普賢品と普賢觀經とによつたといふのは、二つのそれ／＼のどういふ點においてのことなのか、この二つに説いてあることは同じであるかどうか、といふことである。ちよつと見ただけでも、普賢品には三昧のことが見えてはゐるが、その名は記してなく、また懺悔のことも説いてないのに、普賢觀經には、法華三昧の名はないが、諸佛現前三昧の名が見えてゐるし、懺悔のこともいつてあるので、この二つに説かれてゐることは、その間に關係はあるけれども、それ／＼ちがつてゐるからである。第二には、智顗が法華經には名のみ見えてゐる法華三昧といふものをどう解してこの名を用ゐたのか、また法華經には説いてない懺悔をそれに結びつけたのは何故であるか、といふことである。第三には、法華三昧懺儀といふものを定めたのは、そも／＼何のためであるか、といふことである。

まづ第一の問題について考へてみる。法華經の普賢品には、普賢がシヤカムニに對していつたこととして、次のようなことが説いてある。佛滅の後五百歳の濁惡の世のなかで法華經を受持するものがあれば、普賢はその人を守護し、もろ／＼の魔障などを除いて安穩な生活のできるようにする。その人が歩行したり立つたりして法華經を讀誦するばあひ、または坐してこの經を思惟するばあひには、普賢は六牙の白象に乗つてその前にあらはれ、さうして或はその心を慰め、また共に法華經を供養し、或はその人の忘れた一句一偈を教へもする。そこで、その經を受持讀誦するものは、普賢を見ることができたために、三昧および陀羅尼が得られる。また法華經を受持讀誦書寫する比丘比丘尼優婆塞優婆夷などがそれを修習せんとするばあひには、三七日のうち一心に精進すれば、その満ちた日に、普賢が六牙の白象に乗つてその人の前にあらはれ、説法示教しまた陀羅尼呪を與へる。法華經を受持し讀誦し憶念し解義し如説修行することのできるのは、普賢の威神力のおかげであるので、さうすることがすなはち普賢行である。一くちにいふと、普賢はその神通力で法華經とそれを受持するものとを守護し、さうしてこの經を世界に流布させる。かういふのである。その次に、この普賢のことばに對するシヤカムニのことばとして、われは

法華經の守護者である普賢の名を受持するものを守護する、法華經を受持讀誦修習するものは即ちわれを見るものであり、わが口からこの經をきくものである、といふことが説いてある。法華經またはこの經を受持するものを守護するのは、もろ／＼の佛であり、多くの菩薩であり、さまざまの鬼神であるように、ほかの諸品では説いてあるのに、こゝにそれを普賢のみのこととしてあるのは、特殊の考へかたであるから、これはだぶん、この普賢品があとから法華經につけたされたものの一つであることを、示すものであらう。

次に普賢觀經は、かなり混雜した説きかたがしてあるので、その或る部分は後から書き加へられたのではなからうかとも思はれるが、そのおほむねは、普賢の色身を見、多寶佛塔を見、シヤカムニその分身とを見、十方の佛とその國とその説法のさまとを見、また六根の清淨を得るには、大乘の經を誦讀し、大乘の義を思惟し、大乘の事を念じ、また十方の數かぎりなき佛を禮拜し、懺悔の法を行ふべきである、として、その方法を教へたものであり、一日乃至三七日といふような一定の期日の間その法を行へば、普賢によつて諸佛現前三昧を得、また多くの陀羅尼を得、さうして上に述べた効果が得られる、といふのである。のみならず、後にいふように、菩薩の正位に入ることも、また佛の功德を具へもろ／＼の惡を除き佛の智慧を得ることも、できるように説いてあるところさへある。普賢品に本づいて説かれたものではあるが、普賢品では、普賢がその色身であらはずのは、法華經またはそれを受持するものを守護し經の修習を助けるためであり、普賢品のほかの法華經の諸品でも、十方世界にシヤカムニの分身の數かぎりなくゐるといふことも、多寶佛塔のあらはれたことも、法華經を説き法華經を讚歎するためとあるのに、普賢觀經では、その本末が逆になつてゐて、普賢の色身を見、シヤカムニの分身や多寶塔を見るために、大乘の經典を誦讀しその義を思惟することになつてゐる。三七日の間一心精進するといふのも、普賢品では法華經を修習することであるのに、普賢觀經では禮佛懺悔などを含むこの經の意義での普賢行を修することである。普賢品には懺悔といふ

ことの説いてないのに、普賢觀經にそれがあるのも、普賢品は、法華經そのほかの諸品と同じく、法華經の尊いこととその功德の大きいことを説きその經のもつてゐる呪力を説くのが主旨であるのに、この經は、いはゆる行者のために、普賢の色身などを見、三昧を得、陀羅尼を得るための、方法を教へるのが本意であるからであらう。法華經の安樂行品のをはりの偈に、法華經を聞きまたは讀むものが、夢のうちで、もろ／＼の佛の説法するところを見、おのれみづからの説法するところ禪定に入つてゐるところなどを見る、といふことが説いてあるのも、經の功德をいふのが主であるのに、普賢觀經に、法華經を讀誦または受持することによつて佛やその分身が見られるとし、佛を見ることのできるのは、經のもつ呪力のゆゑであるように説いてあるところがあつて、大乘力といふことばがその意義でいはれてゐたり、また大乘經すなはち法華經の力によつて普賢が見られ、その普賢の力によつて佛を見ることができると説いてあつたりするのは、佛を見ることが主になつてゐることも、思ひあはさるべき。

さて、上にいつた方法がすなはちこの普賢觀經で普賢行といはれてゐるものであるらしく、「修行大乘方等經典、正念思惟一實境界」といふのも、「行大乘無上法」といふのも、または「思惟大乘」とか「思大乘事、念大乘事」とかいふのも、そのことであるように見える。だから、この大乘の法といふものは、持戒禪定などの修行をさしてゐるのではない。修行は大乘の經を修行することであり、その經を誦讀し經の意義を思惟することであるので、「不入三昧、但誦持故」といつてあるのも、そのためであらう。「不斷煩惱、不離五欲、得淨諸根、滅除諸罪」といふのも、またそれを示すものであるらしい。(諸佛現前三昧が得られるともあるが、これは普賢行を行ふことによつてこの三昧が得られるといふのであつて、三昧に入ることが普賢行の一つであるといふのではない。この名の三昧にかぎらず、この經には、三昧を修行するといふことはどこにも説いてない。)この點においては、普賢觀經の思想には法華經のそれがうけつがれてゐるのであつて、大乘の經典を修行するといふのは

妙莊嚴本事品などの「修行妙法華經」と、また一實境界を思惟するとか大乘を思惟するとかいふのは普賢品の「思惟此經」と同じ意義であり、大乘經、すなはち法華經、を讀誦受持讚歎供養し、また經文に説いてあることの意義を經文そのものについて思惟すること、すなはち理解することであらう。「思惟一實境界」また「思惟大乘」といふことばの意義については、同じ普賢觀經に「誦大乘經、讀大乘經、思大乘義、または「誦讀大乘經、思大乘義、」などとあるばあひの「思大乘義」と同じであるべきことを、考ふべきである。さうしてそこに大乘佛教の一つのすがたが見られるのである。

ところで、智顗の法華三昧懺儀は、後にいふような二つ三つの點において、普賢品から來てゐるところがあるが、そのほかの點では、おもに普賢觀經によつたものである。それは「勸修第一」において、普賢の色身を見、シヤカムニヤその分身や十方の佛や多寶佛塔やを見、また六根が清淨になり、現身で菩薩の正位に入ること、などの効果を得るためには、三七日のうち一心に精進してこの法を修すべきである、と説いてあることによつても、知られよう。さてその法は、嚴淨道場、淨身三業供養、奉請三寶、讚歎三寶、禮佛、懺悔、行道、旋繞、誦法華經、思惟一實境界、の十法に分けて示してあるが、これも普賢觀經の説を具體化したものといつてよい。「止觀」の法華三昧の條には、讚歎三寶の項が無く、またおしまひに證相の一項が加へてあるが、讚歎は奉請のうちに含まれてゐるのであらうし、證相は、法とすべきものではないからか、懺儀では別の條に説いてある。たゞ「止觀」では第十の思惟一實境界にあたるところが坐禪となつてゐ、懺儀のほうでも第十の説明には坐禪實相正觀としてあるから、智顗は思惟一實境界の語を普賢觀經から取りながら、それを坐禪して諸法の實相を觀する意義に解した用ゐたようであり、そこに普賢觀經と一致しないところがある。またこの法を法華三昧といつてあること、この法を行ふことによつて三昧が得られるのではなくして、この法がすなはち法華三昧であるかのごとく説かれ、従つて三昧は得られるのではなくして修すべきものであるようになってゐること、この法を修することの効果のうちには、上にいつたことのほ

かに、「得普現色身、一念之中 不起滅定、遍至十方一切佛土、供養一切諸佛、」とか「現種々色身、作種々神變、」とか「放大光明、說法、度脫一切衆生、」とかいふような神通力を得ること、または「入佛境界」とか「淨一切煩惱、滅一切障道罪、」とか「六一切諸佛自在功德」とかいふようなことも擧げてあること、これらの點においても、法華三昧懺儀の説は普賢觀經とちがつてゐる。そこで、法華三昧の名を法華經からとりながら、法華經には見えないこと、特に懺悔のこと、の說いてある普賢觀經により、またさうしながらその普賢觀經ともちがふことの說いてゐるのは、どういふ考へかたからであらうか、そもく法華三昧といふものをどう解してゐるのであらうか、といふ疑問が起るが、それはすなはち上に第二の問題としておいたことである。

第二の問題についてまづ考へねばならぬのは、法華三昧といふもののことであるが、法華三昧懺儀の「勸修第一」によると、「一心精進、修法華三昧、」とある法華三昧は、すなはちこの懺儀の示す方法の全體、すなはち上にいつた十法のすべて、であるように見えると共に、「修行此經」（法華經および普賢觀經のいひかたに従へば、それはすなはち法華經を讀誦受持解説書寫讚歎供養すること）が法華三昧であるようにも解せられ、また「前方便第二」によると、法華三昧は「禮佛懺悔、行道誦經、坐禪觀行、」であるらしくも見られるようである。ところが、請三寶方法のうちに「願得法華三昧普現色身」といふことがあるのによると、法華三昧は奉請三寶、従つてまた十法のうちの第一から第九まで、すなはち嚴淨道場から誦法華經まで、を含んでゐないのであつて、第十の思惟一實境界、すなはち坐禪實相正觀、をさすものと解しなければならぬようであり、修證相を說いてあるところに、上根の中品として、寂定の中に普賢を見、またそれによつて三昧および陀羅尼を得ることが、またその上品として、寂定の中に普賢を見、シヤカムニおよび多寶佛とその分身や十方の佛とを見、佛の智見を開き菩薩の位に入ることが、說いてゐるのも、またそれを證するものであらう。普賢や佛を見ることに法華三昧のおもなはたらきまたは効果があ

り、さうして寂定また禪定といつてあるのがその三昧として解せられるからである。

なほ上に引いた請三寶方法のうちのことによると、法華三昧は普現色身三昧といはれるものをさしてゐるようであるが、「止觀」の法華三昧の説明のばあひにも、普現色身三昧と語言陀羅尼とはみな法華三昧の異名であるといつてあつて、この普現色身三昧といふのは、それが語言陀羅尼の名と並べて説かれてゐるのを見ると、法華經の藥王菩薩品（と妙音菩薩品と）にある現一切色身三昧のこととして考へられてゐるらしい（正法華の藥王菩薩品には普現三昧としてある）。妙音菩薩品に、菩薩が種々の身を現じて衆生を濟度する神通力をもつてゐるのは現一切色身三昧に住するが故である、といつてあるが、「止觀」に「示喜見身者、是普現色身三昧也、」といつて、普現色身三昧の名を普賢品にある普賢が法華經を修習する人の前にその身をあらはすといふことに關係させて説いてあることが、それについて考へあはされよう。（普賢品のもとの文は「以一切衆生所喜見身、現其人前、」であるから、「止觀」に説いてあることはその意義を正しく傳へたものではなく、普現色身三昧の名も普賢品には記されてゐないが、「止觀」の説が普賢品によつたものであることは、疑があるまい。）普賢觀經にも普現色身三昧の名が見えてゐて、それは法華經の見寶塔品にある多寶如來が塔のうちで入つてゐた三昧の名として、またそれとは別に善德といふ佛の入つた三昧の名として、記されてゐるが、いづれも法華經には無いことであり、また「止觀」の上記の説に見える同じ名のもともつながりが無いようである。それよりも、その普賢觀經の諸佛現前三昧が、或は智顗によつて普現色身三昧と同じものとせられてゐたのではないかとおしはかられる。「止觀」の法華三昧の説明には普賢觀經が引いてあるからである。普賢觀經の諸佛現前三昧は、行者がその得たこの三昧の効果として十方の佛とその國とを明かに見ることできるもののように記されてゐるから、菩薩の住する現一切色身三昧がその効果として衆生の前にいろ／＼の身をあらはすのとは、主客の地位がちがふが、目のまへに佛または菩薩の現はれる點に共通のところがある。このことについてはなほ後にいはう。（ついでに

いふ。「止觀」のこの條に「普賢觀曰」として引いてある辭句は原典のまゝではなく、原典にはない法華三昧語言陀羅尼の名や、また法華經の法師品の辭句などが、加はつてゐる。しかし、法華經に法華三昧といつてあるのが、同じ經の現一切色身三昧と同じであるかどうかは、明かにわからぬ。のみならず、妙音菩薩品や妙莊嚴王品における法華三昧の名の記しかたから見ると、同じであるようには見がたくはあるまいか。ところが智顗はそれを同じものと考へたらしい。その理由は後にいふこととして、ともかくもかう考へたとすれば、さうしてその現一切色身三昧が「止觀」の普現色身三昧であるとすれば、さうしてまたそれを請三寶方法のうちにある法華三昧が普現色身三昧をさしてゐるらしいことに照しあはせてみれば、智顗のいふ法華三昧は、この點から見ても、「止觀」または法華三昧懺儀の第十法である坐禪をさしたものとしくはなつてはなるまい。「文句」の妙音菩薩品の釋に、現一切色身三昧と陀羅尼とをつゞけていつてあることについて「三昧與陀羅尼、體一而用異、寂用爲三昧、持用爲陀羅尼、又色身變現、名三昧、音聲辯說、名陀羅尼」といつてあるが、三昧だけの説明についていふと、寂用は三昧そのことの性質を、色身變現はこの現一切色身三昧のはたらきを、説いたものらしい。現一切色身三昧は、そのはたらきの上からこのような名をもつことになつたので、三昧そのものはやはり身心不動の境地なのであらう。さうしてそれが、智顗によつて、法華三昧のこととせられてゐるのである。なほ「止觀」にも法華三昧懺儀にも、法華經の安樂行品のことがいつてあるが、この品には法華三昧の名が見えてゐないにもかゝらず、さうなつてゐるのは、そこに菩薩が禪定によつて諸法の實相を觀することと、法華經を讀誦するものが夢の中で佛を見ることが、説いてあるからのことらしい。もしさうならば、これもまた、智顗においては、法華三昧が坐禪實相正觀のこととして考へられてゐることを、示すものであらう。

ところが、かう見ることにまたつごうのわるい點があるので、それは「止觀」に、常坐三昧、常行三昧、半行半坐三昧、非行非坐三昧、を四種三昧とし、法華三昧はその半行半坐三昧であるとしてあることである。法華三昧が半行半坐であるとす

るならば、それはその「行」を含んでゐる點において坐禪のみをいふのではないことになり、また後にいふように行（行道）には誦經をするのであるから、その點からもまた坐禪のみのことではないとしなければなるまい。もつともこれには、半行半坐三昧といふ名に問題があることを考へねばならぬ。三昧といふことばの意義を法華經について考へると、その序品に「結伽趺坐、入於無量義處三昧、身心不動」とあるのによつてもわかるごとく、身も心も動かざる境地をいふことばであることは明かであり、従つて方便品のはじめに「世尊、從三昧安祥而起、告舍利弗、」とあるごとく、何ごとかをいひ何ごとかをすることは、三昧の境地から出なければならぬのである。三昧がサマーチの音を寫したものであり、「定」と譯せられたばあひもあるとすれば、これはあたりまへである。さすれば、常坐三昧と非行非坐三昧とはしばらくおき、常行と半行半坐とは、少くとも「行」が伴つてゐる點において、三昧といはるべきものではあるまい。しかるにそれを三昧といふのは、このことばのものと意義にはかなはないことにならう。常行三昧は般舟三昧經に説いてあることのようにいつてあるが、それは、この經に三昧を得るためにすべきこととして四とほりの四事法といふことが記してあり、さうしてその第二の四事法の一つとして「經行不得休息、三月、」といふことがあるからであらう。しかしこれは三昧そのもののことではなく、また三昧を得るためにすべきことのすべてでもない。だから常行による三昧といふことも、常行三昧といふ名をつけることも、この經の説とはちがつてゐるので、常行三昧といふものは實は無いといふべきである。さすれば、半行半坐三昧といふものも、またこの點においては同じである。けれども智顗は三昧に半行半坐のがあるといひ、さうして法華三昧がそれであるといつてゐるのであるから、智顗のいふ法華三昧は、少くとも坐禪のみのことではなく、行道と誦經とを含んだものと解しなければならぬのである。さうしてそれが含まれるとすれば、上にいつたように、十法の第一から第九までのすべてを含めて法華三昧と稱したとも見られるのである。

もつともこれは、たゞいひかたの上において、三昧といふことばの意義がそこまでおしひろめられたまでであつて、法華三昧の本體は坐禪であると考へられてゐたのかとも、おしはかられる。十法のうちの行道誦經までは第十の思惟一實境界、すなはち坐禪實相正觀、に入る準備または前段階としてせられねばならぬことであるが、最も大せつなことは思惟一實境界であるとも考へられ、さうしてその思惟一實境界は、智顗の思想においては、坐禪によつて一切法空如實相を觀することであるが、一切法の空なることとそれが諸法の實相であることとは、法華經そのものの根本の思想であるから、それを觀することを法華三昧といふのは、ふさはしい名だからである。法華經にこの名をいかなる三昧として用ゐてあるかはわからぬが、智顗がこの意義のものとしてその名を用ゐたのは、このためであるように解せられる。深三昧といつてあるのもまたこの坐禪實相正觀のことであつて、十法のうちの第九まではすでに深三昧に入ることのできないもののために、「先以事法、調伏其心、」する方法として定められたものであるから、人によつてはそれは行はなくてもよい、とすらいつてゐるばあひのあることも、考へあはされよう。

しかしまた、智顗によつて定められた法華三昧の方式においては、行道誦經が大せつなことであるので、この三昧が半行半坐三昧とせられたのも、行道誦經が坐禪と共に行はれるからのことであらうから、この意味において行道誦經と坐禪とは同じ地位に立ち同等の價值のあるものと考へられたにちがひなく、従つて行道誦經が坐禪の準備または前段階としての方法に過ぎないと見ることは、できないようである。もとく半行半坐といふことは、法華經の普賢品に「是人若行若立、讀誦此經、我爾時、乘六牙白象王、與大菩薩衆、俱詣其所、而自現其身、……是人若坐思惟此經、爾時、我復乘白象王、現其人前、……」とあるところから來てゐるのであらうが、この普賢品にいつてあることは、たゞ法華經を讀誦することと思惟すること（經文の意義を理解すること）とを、行立と坐とにわけていつたまでのことであり、二つとも、法華經にいつてあるような意義での

この經の修行といふことには含まれてゐるであらうが、懺悔に示してあるような特殊のばあひにおける一定の方法として説かれてゐるのではなく、もとより三昧と名づけられることをいつたのではない。(譬喩品のはじめにも「若坐若行、每作是念、」といふことがあるので、坐と行とをわけて、または相對することとして、いふのは、人のしわざをいふばあひにはあたりまへのいひかたである。行に對する坐が坐禪の義でないことは、明かであらう。)いはゆる普賢行とその方法を説いてある普賢觀經にこのことの見えないのも、そのためかと考へられる。この經にも心の空なること一切法の空なることを觀することがいつてはあるが、或はそれを、後にいふように、懺悔と結びつけ、或はそれを經を讀誦することに關係させて、説いてあつて、誦經に對する坐禪として、または行立してすることに對する坐してすることとして、説いてはない。だから智顗の懺悔に一定の方法として行道誦經を説いてあるのは、智顗の考であつて法華經の普賢品には無いことであり、普賢觀經によつたことでもないが、しかしその考の由來が普賢品にある以上、行道誦經と坐禪とは相對するもの同じ價值をもつものとして、智顗には考へられてゐたことがおしはかられるので、半行半坐といふようなことを用ゐたことによつても、それは知られるのではあるまいか。もしさうならば、半行半坐三昧の一つであるといふ法華三昧は、行道誦經をも含むものと見なければならぬ。また誦經だけについて考へると、法華經に經を讀誦することの功德のいたるところに説いてあることはいふまでもなく、普賢觀經においても大乘の經典を讀誦することが重く見られ、くりかへしてそれを行ふようになつてゐるから、智顗が法華經と普賢觀經とによつて考へたとすれば、誦經は坐禪の準備または前段階としてではなく、少くともそれと同じほどな地位と價值とをもつものとして、とりあつかはれてゐたとしなければならぬようである。さすれば、いはゆる法華三昧の本質を、坐禪、すなはちその意義においての思惟一實境界、のみのこととすることは、できないようであつて、少くともそれに行道誦經が含まれてゐると見なすべきものではあるまいか。が、すでに行道誦經もしくは誦經を含むものとすれば、禮佛懺悔も奉請讚歎も、また

それと同じに見られねばならず、つまるところ法華三昧は懺儀に示してある十法の全體をさすものと解すべきもののようである。なほ智顗に於いて法華三昧が法華經の修行と同じものように考へられてゐたとすれば、それは或は、經の修行に誦經讚歎供養のことがあり、さうして法華三昧の十法のうちにもそれらを含ませることにしたためであるかともおしはかれるが、もしさうとすれば、この點からも、法華三昧は十法のすべてをさしたものと解せられるようである。（しかし智顗が經の修行をこのように正しく見てゐたかどうかはよくわからぬから、これは試みにいふまでである。）

たゞかう解するばあひには、別に一つの考へかたがある。それは懺儀の修行一心精進方法を説くところに事中修一心として「行者、初入道場時、卽作是念、我於三七日中、若禮佛時、當一心禮佛、心不異緣、乃至懺悔行道誦經坐禪、悉皆一心、在行法中、無分散意、如是經三七日、是名事中修一心精進、」といつてあることである。これによると「止觀」に引いてある大智度論（卷七）の説のごとく、心の一處に住して動かぬことを三昧とする意義において、入道場から行道誦經までのすべてをも、坐禪と同じく三昧と呼び、従つてまた法華三昧の名のうちにそれらを含ませたのではないかと、おしはかれようか。智顗がこのとほりに考へたかどうかはわからぬが、かういふ解釋もできなくはなからう。懺儀の證相を説いてあるところに、あるひは「於行道時、若坐禪中、」といひ、或は「於行坐之中、入諸禪定、」といひ、また或は「於行座誦念之中、……入深禪定、」といつてあるのを見ても、行（道）のうちで禪定に入るといふような禪定の性質に矛盾するむりないひかたのしてあるのは、行道においても心が一所に住して動かぬありさまにある、といふ意義においていはれたことであらうかと思はれるから、これは智顗がこの解釋のごとき考をもつてゐたことを證するものようである。しかし全體に智顗のいつてゐることは、思想そのものにもそのいひかたにも、いろ／＼の混雜があるので、その間に矛盾の無いようにそれを整理することは、實はできないのであるから、強ひてこのような解釋をするにはおよばないかもしれぬ。従つて、法華三昧といふものが何をさすかについての智

顓の考、少くともその説きかた、は曖昧であるとするほかは無いのもあらう。たゞかの十法の第十の坐禪正觀が法華三昧の本體であるとするにしても、智顓の定めたところでは、それは第一から第九までと離るべからざることであり、それらのすべてが具はらなくてはならないのであるから、その意義で、十法の全體が法華三昧であるといつてもよいことになるのもあらう。十法はまだ深三昧に入ることのできない初學のもののために定めたものであるから、そのできるものは第九までは行はなくてもよく、初から坐禪實相正觀に入るべきだ、といつてはゐるが、定められた懺儀についていふと、かう見られる。

ところで、かういふ法華三昧を修行することの効果としては、普賢の色身を見たり、多寶佛塔やシヤカムニとその分身と十方の佛とを見たり、種々の色身を現じ種々の神變を示したり、することが懺儀に説いてあつて、この三昧を修行するのは、さういふ効果を得るためのこととなつてゐるが、法華經の序品や藥王菩薩品、妙音菩薩品、などに、佛または菩薩が神變相を現じまたは神通力をあらはしたことが説いてあるのを見ると、この點において懺儀の説に法華經から來てゐるところのあることが知られる。もつとも安樂行品では、佛を見ることが説いてあつても、それは法華經を讀誦することの功德としてあつて、三昧の効果とはしてないし、藥王菩薩品には、法華經を聞くを得たために（智顓が法華三昧と同じものとした）現一切色身三昧を得たように説いてあり、妙音菩薩品で多くの菩薩が現一切色身三昧を得たとあるのも、つまるところ、それと同じことになつてゐる。また普賢品では、普賢を見ることが説いてあつても、それによつて三昧が得られるとしてあり、さうして普賢を見ることのできるのは法華經を受持讀誦するからだとしてあつて、やはり三昧を修行することによつて普賢が見られるとはしてない。のみならず、その三昧の名は記してなく、また三昧と共に陀羅尼が得られることになつてゐるので、その三昧が法華三昧と名づけられてゐるものであるようには見えない。だからこの點においては、懺儀の説は法華經とはちがつてゐるが、こゝにいつたのは、三昧の効果またははたらきとして佛やその國が見られ神變があらはれるといふことにおいてである。法華經に

はいろ／＼の三昧の名が見えてゐるので、法華三昧もそのうちの一つであるが、それがどういふ性質のものであるかは經のどこにも説いてないのを、智顗は上に述べたやうないろ／＼の説明をそれに加へ、またこのような効果があるやうに考へたのである。また普賢觀經には諸佛現前三昧を得ることによつて佛やその國を見ることの説いてあるところもあるが、それを法華三昧とはしてないのを、智顗は、上に述べたやうに、法華三昧をその諸佛現前三昧のことと考へたらしい。これはたぶん、法華三昧に佛を見る効果があることにしたために、それを諸佛現前三昧と同じだとしたのであらう。現一切色身三昧を法華三昧のこととして見たのも、同じ理由からであらう。

さて、これまで考へて來たのは、懺儀と「止觀」とにおいて法華三昧といふものがどういふやうに説かれてゐるかといふことであるが、法華經と普賢觀經ともとづいて考へられながら、そのいづれにも一致しないことになつてゐる。シナの佛家のものごとの考へかたや經文の解釋のしかたは、極めてほしいまゝなものであるから、智顗の説いたことや書いたものにもまたそれがあるのは、あたりまへであらう。普賢品によつて考へられた半行半坐三昧といふものが、その普賢品の思想とは全くちがつてゐるといふことは、上にすでに述べたが、これもその一つの例である。安樂行品は、後世になつて法華經を説くにはどういふばあひにおいて、またどういふ條件の下において、すべきか、といふことを教へたものであつて、法華三昧とは何のかはよりも無いものであるのに、それが深い關係のあるものであるやうにいつてゐるのも、一品の全體の主旨を考へずに、そのうちの或る語句だけによつての思ひつきから出たことであつて、やはり經文のほしいまゝなりあつかひかたの例である。（安樂行品に菩薩が禪定において諸法の實相を觀ずることの説いてゐるのは、こゝにいつた條件の一つとしての菩薩親近所といふことをいつたところであり、さうしてそれはすでに菩薩となつたもののことであつて、これから三昧の修行に入らうとするものではなく、またそれに法華三昧といふ名もつけてない。また法華經を讀誦するものが夢のうちで禪定に入つて十

方の佛を見るといふこともいつてあるが、それは夢のうちでの禪定においてのことであり、つまり夢のうちで佛を見ることなのである。普賢觀經の思惟一實境界の語をとつて、それを坐禪によつて一切法の空を觀することとしたのも、一つは思惟といふ語がいろ／＼の經典において坐禪觀行の義に用ゐられるばあひがあるからのことでもあるが、普賢觀經のこの語の意義と經の全體の精神とをよく考へてみなかつたからでもある。この經には、このことをいふばあひにも坐禪といふことばは用ゐてなく、また一切法の空を觀することは説いてあつても、そこに禪定とも三昧ともいつてないし、經の全體の精神が、法華經を讀誦し經文の意義を理解しまた禮佛懺悔をするといふ意義においての、普賢行を説くところにあることは、上に述べたとほりである。よく經の本文を讀んでみれば、この語の意義はおのづからわかるはずであるのに、それがしてないのである。或はまた一切法空を觀するのが法華三昧の本體であるような説きかたをしてゐるのと、いはゆる普現色身三昧が法華三昧であるといつてゐるのとの間に、どういふ關係があるかの示されてゐないのは、考へかたの整つてゐないことを語るものであらう。なほ「文句」の妙莊嚴王品の釋に「法華三昧者、攝一切法、歸一實相、」といつてあるようなのは、具體的に法華三昧の何であるかを説いたのではなくして、それにこの上もない價值のあることを抽象的なことばで、たゞ「一實相」といふ法華經に縁の深い語を用ゐて、いつたまでのことらしいが、その意義は曖昧でもありばんやりしてもゐるので、それは一つはシナ語の性質からも來てゐるが、智顗の考へかたがはつきりしてゐないからでもある。大せつな法華三昧が、このような考へかたで説かれてゐるのである。

次に問題となるのは懺悔のことである。法華三昧懺儀に示してある方法においては、懺悔が重い地位を占めてゐるので、その方法の全體が懺儀とも懺法ともまたは懺悔行法ともいはれてゐるほどであるが、この懺悔と法華三昧とはどういふ關係があるかとせられたのであらうか。すでに述べたように、法華經にはどこにも懺悔のことは見えてゐないが、普賢觀經にはそれが説

いてあり、普賢行の一つとしてくりかへしくりかへし懺悔をしなければならぬように示してある。懺儀はこの普賢觀經の説に本づいて定められたのであらうから、そこでまづ、この經で懺悔といふのはどういふ意義のことであるかを、考へてみなければならぬ。それは、おしなべていふと、あらゆる罪業を懺悔することであるが、特に大せつなこととして説いてあるのは、六根清淨懺悔の法と、大懺悔とも莊嚴懺悔とも無罪相懺悔とも、また破壊心懺悔とも名づけてあるものと、この二つである。第一のは、六根によつて生ずる罪業を懺悔することであるが、これは法華經の法師功德品の説にもとづいたものらしい。たゞし法華經では、この經を讀誦受持書寫解說するものは、六根がみな清淨になりすぐれたはたらきをするようになりまたそれによつて佛法の妙旨を知るようになる、といふように、法華經の功德を説いてあるのに、普賢經では、一日または七日の間、定められた方法によつて、大乘の經を讀誦すると共に、佛に對してこの懺悔の法を行ふことによつて、六根が清淨になり罪障が減び、と説いてある。懺悔のことは佛教のいろ／＼の經典に見えてゐるが、罪業が六根のしわざとせられるのは常識的の考へかたであるから、そこで、法華經の説を懺悔の思想に結びつけることによつて、このような法が立てられたのであらう。懺儀は、この普賢觀經の説にもとづいて、道場で唱へることを六根の一つ／＼について記してあるので、そこにこの懺悔の儀禮化がある。ところで、この六根清淨懺悔の法を行へば、それ（と普賢の力と）によつて諸佛現前三昧が得られ、さうしてその三昧力の故に佛が見られる、といふのが普賢觀經の説のようであるが、懺儀ではそれを法華三昧の一つの方法としてある。智願は、この點でも、諸佛現前三昧を法華三昧のことと解してゐるようである。

次に第二のは、心の無心なるを觀じ、我が心の空なること、従つて罪も福も主が無いこと、一切法もまた本來寂靜であることとを、さることであるが、それを懺悔といふのは、すべての業障がこのことをさとらないための妄想顛倒想から生ずるものだからのことであらう。懺儀には、普賢觀經のこのことを説いてある辭句をとり、従つてそれを懺悔と稱しながら、第十の坐

禪實相正觀としてそれを説いてあるので、上に述べたごとく、智顗の考では、それが法華三昧の本體とせられてゐるようである。普賢觀經では、こゝに「觀心無心」とかまたは「觀法空無相」または「端坐念實相」とか、いふようなことばは用ゐてゐるが、禪定とも三昧ともいつてはなく、さうして「汝誦讀大乘經故、十方諸佛、說懺悔法、」といつてこのことが説いてあり、またこの懺悔の効果として普賢や十方の佛を見ることを述べた後に「時諸世尊……爲於行者、說無相法、行者聞說第一義空、行者聞已、……應時即入菩薩正位、」ともいつてあるし、法空無相を觀するにも大乘經を誦することが伴ふように説いてもあるから、それを坐禪觀行のこととはしてないようである。然るに懺悔では、この懺悔がすなはち坐禪觀行であり法華三昧であることになつてゐる。これは、普賢觀經のいはゆる普賢行が、坐禪もしくは三昧を修行することではなく、「思惟一實境界」も法華經の經文の意義を經文について思惟することであるのに、懺悔は法華三昧の本體を坐禪實相正觀とし、「思惟一實境界」をもその意義のこととしてゐるからのことである。けれども、坐禪によつて諸法の實相を觀することを懺悔といふのは、懺悔の語の正しい用ゐかたではあるまい。これは、このことについて普賢觀經の辭句をそのままに寫しとつたための混雜である。それで、懺悔の説においてはほんとうに懺悔とせられるものは、第一の六根清淨懺悔のそれのみになる。

さてこの懺悔の効果であるが、普賢觀經において、六根清淨懺悔の法（と普賢の力と）によつて諸佛現前三昧が得られ、その三昧の力で佛が見られるとしてあることは、上にすでに述べた。しかしこの三昧が得られるのは、この懺悔のみの効果とせられたのではないらしく、あらゆる罪業の懺悔によつてもまた同じ効果があるように解せられる書きかたがしてある。また懺悔すると共に大乘經を讀み大乘の義を思ふことによつて普賢および多くの佛が見られるとも、大乘經を受持するものは普賢の神通力の故に普賢およびそれと同じ多くの菩薩が見られるとも、説いてあるので、このあとのほうの二つの説きかたにおいては、經の力によりその功德として普賢を見るとした點では、普賢品の思想をうけついだものであり、また多くの佛や菩薩を見

ることにした點では、それを一層展開させたものである。たゞまへのほうのばあひに懺悔のことをいつてゐるのは、普賢品には見えない考であるが、その懺悔にも經を讀むことを伴はせたのが、法華經から來たところなのである。經を受持するものは大乘力（大乘經の力といふことであらう）のゆゑに佛が見られると説いてあるばあひもあるが、それにもたぶん懺悔をするところが考へられてゐるのであらう。さう明かに書いてはないが、この經の全體の説きかたから、さうおしはかられる。なほ經をよみまたはそれと共に懺悔することによつて夢に普賢や佛を見ることが説いてあるが、夢に見るとした點は、安樂行品の説から來てゐるのであらうか（後にいふように、なかの經にもこのことが見えてはゐるが）。懺悔でも、罪障が減びるから三昧に入り得るとしてあるが、罪障が減びるのは懺悔のゆゑと考へられてゐるのであらうから、この點は普賢觀經をうけついでのものであり、また三昧力のゆゑに無量の佛が見られるとしてあるが、これも普賢觀經の説にもとづいたところのあるものである。たゞし、安樂行品によつたところがありながら、夢のうちに普賢や佛を見るといふことは説いてないが、これは禪定を主とし三昧をもととして考へられてゐるからのことであらう。なほ六根清淨の懺悔のことばに大乘の經を讀むことが述べてあるのも、やはり懺悔に誦經を伴はせてある普賢觀經の説から來てゐるらしい。けれども懺悔の三昧は、懺悔または誦經または普賢の神通力によつて得られるものではなくして、特に修行をしなければならぬもの、すなはち坐禪によつて諸法の空なることを觀する法華三懺であるから、この點では普賢觀經とはちがつてゐる。

智頭の法華三昧がどういふものであり、それと法華經および普賢觀經の説との間にどういふ關係があるか、といふことは、これまで述べて來たところによつてほど知られたであらう。法華經との關係をつめていふと、法華三昧といふ名は法華經に見えてゐるものであるが、それを半行半坐三昧の一つとしたのは、普賢品の文字にもとの意義とはちがつた解釋をしたためであり、この三昧の本體を坐禪によつて諸法の實相を觀することとしたのは、經には全く見えてゐないこと、智頭のはじめて考

へたこと、であるが、さう考へたことには、安樂行品のうちの文字を思ひよせたところから來たところがあるらしい。一切法は空であり本來寂靜であつてそれが諸法の實相であるといふことは、法華經の思想であるが、禪定においてそれを觀するといふことは、この安樂行品に菩薩親近處のこととして説いてあるのみであるから、智顗はそれに目をつけたのであらう。法華經の呪力を説き法華經を讀誦し受持し修行することの功德を説くことに力を入れてゐるこの經の全體の説きかたから見ると、よし菩薩が末の世になつて經を説くばあひの一つの條件としていはれてゐるだけのものにせよ、安樂行品のこの説には、かなり調子のちがつてゐるところがある。これはすでに菩薩となつたものについていつたのであつて、はじめて法華經の修行をするもののかつてゐたのではないからであらう。しかし智顗は、それによつてこれから禪定を修行するもののかつてゐることを説き、さうしてそれに法華三昧の名を與へたのである。また法華三昧は普現色身三昧であるといつてゐるのは、この三昧を藥王菩薩品などに見える現一切色身三昧のことと見たからのことである。これらの點と、また普賢を見るといふ點と、法華經を讀誦することを重く見てゐる點とに、智顗の法華三昧の説の法華經にもとづいたところがある。けれどもこの法華三昧は特殊の方法によつて修行すべきものであり、さうしてその方法を定めたのが懺儀であるのに、法華經には、法華三昧のみならず、一般に三昧の修行といふことは全く説いてないから、そこにこの懺儀の思想が法華經から離れたものであることの根本がある。次に普賢觀經との關係は、すでにくりかへし述べておいたから、あらためていふには及ぶまいが、最も大せつな點は、經には法華三昧の名も見えず、また三昧の修行といふことも説いてないのに、懺儀は法華三昧の修行の方法を示すところにその主旨があり、さうしてそこでは經の諸佛現前三昧が法華三昧のことのように考へられてゐるらしい。ところで、この法華三昧の効果については、上にもをりにふれていつたことがあるが、いま一おうそれを考へてみななければならぬ。さうしてそれは、この三昧の性質を一きは明かにすることになると共に、それが佛教の思想の全體においていかなる地位をもつものであるかをも示す

ことになる。さうしてそれによつて、この稿のはじめに第三の問題として擧げておいたことが、おのづから解釋せられるであらう。

このことを考へるについて、まづ法華經で三昧といふものがどのようにとりあつかはれてゐるかをたづねてみることにする。法華經には、序品に佛が結伽趺坐して無量義處三昧に入つたことが記されてゐるが、藥王菩薩品には、一切衆生喜見菩薩すなはち藥王菩薩が現一切色身三昧（正法華では普現三昧）を得たことが説いてあり、妙音菩薩品には、この名の菩薩が妙幢相三昧、法華三昧、淨德三昧、およびそのほかの多くの三昧を得たこと、現一切色身三昧（正法華には現入衆像三昧としてある）に住したること、この菩薩に従つてゐた多くの菩薩が同じ現一切色身三昧を得、華德菩薩が法華三昧を得たこと、が記されてゐ、また妙莊嚴王品には、淨藏淨眼といふふたりのものが菩薩淨三昧、日星宿三昧、およびそのほかのいろいろの三昧を得てそれに通達してゐたとあるほかに、法華三昧、離諸惡趣三昧、諸佛集三昧、一切淨功德莊嚴三昧、の名も記されてゐる。このように三昧にいろいろのがあり、さうしてその一つ／＼に名がつけてあることについては、あとで考へるとして、こゝでまづ問題となるのは、上に述べたように三昧を得ることの意義である。サマーチは一定の方法による修行の過程を経て住することのできるようになつた心の特殊の境地であらうが、それを得るといふのはどういふことであらうか。法華經に説いてあるところを見ると、藥王菩薩が現一切色身三昧を得たのは、法華經を聞いた力の故であると、この菩薩みづからのいつたことになつてゐるが、また萬二千歳のあいだ一心に佛になることを求めて精進經行したためのようにも記してあるし、なおのが臂を焼いてブダを供養したために數かぎりなき人々がこの三昧を得たともしてある。また妙音菩薩が多くの三昧を得たのは、さまざまの徳本を植ゑ無量の佛を供養することによつて深い智慧を成しとげたためのように記してあるが、多くの菩薩が現一切色身三昧を得たのは、妙音菩薩が三昧に住して神變を現はした時にそれに従つてゐたからのようにいつてあり、また

華德菩薩が法華三昧を得たのは、佛がこの法華經の妙音菩薩來住品を説いた時のこととなつてゐる。淨藏淨眼のふたりがさまざまの三昧を得たのは、久しく菩薩の行ふ道を修めたからのこととしてあるように見えるし、一切淨功德三昧を得たのは、法華經を修行したからのことであるらしい。たゞ離諸惡趣三昧や諸佛集三昧がどうして得られたかは、明かに記してないようであり、それらと同じところに書いてある法華三昧についても、また淨眼がそれに通達してゐるといふことのみがいつてある。ついでにいふが、すでに述べたごとく、普賢品には、法華經を受持讀誦することによつて普賢が見られ、普賢を見ることによつて三昧を得るとしてある（この三昧には名がつけてない）。

それで、これらをまとめて考へると、三昧を得たのは、それ／＼の三昧の境地に住することのできるようになる特殊の修行習練によつたのではなくして、法華經をきいたとか受持してゐたとか、または佛を供養したとかいふ、三昧そのことには直接の關係の無いことによつたもののように解せられる。みづからは何ごとをもせず、たゞ何等かの意味で接觸のあつた菩薩のしわざのおかげで得た、としてあるばあひさへある。菩薩の行ふ道を修めたといふばあひのは、その道のうちに三昧の修行が含まれてゐるようにも見えるが、こゝにかういつてあるのは、そのいひかたから考へると、むしろ三昧のほかのことがらを主にしていつたものであるらしい。従つて、三昧を得るといふのは、三昧の境地に住することのできる能力を、みづからの修行習練によつて養ふのではなくして、他から與へられるといふ意義であらう。佛はいかなる三昧にも入る能力をもつてゐるのであつて、無量義處三昧に住したといふのはその一つの例であるが、佛ならぬものは、何等かの縁によつてその能力を與へられねばならぬのである。さうして與へられた能力によつてその三昧に住することに慣れるのが、通達といつてあることなのであらう。三昧を得るといふことをこのように解するのは、三昧と共に陀羅尼を得るといふことが妙音菩薩品にも普賢品にも見え、また藥王菩薩品には現一切色身三昧を得たこの菩薩が、佛を供養したために、解一切衆生語言陀羅尼を得たとしてあるこ

とによつても、たしかめられよう。このばあひに陀羅尼といふのは、陀羅尼呪ともいはれる呪言のことではなくして、佛の教を把握し記憶し辯説する能力のことらしいからである。藥王菩薩品に解一切衆生語言陀羅尼の名があると共に、妙音菩薩品には、解一切衆生語言三昧の名があることを考へると、三昧と陀羅尼との間には密接な關係があるものと見られてゐたことがおしはかられるので、三昧と陀羅尼とは佛の道に達する二つの能力として考へられてゐるのであらう。（正法華には、羅什譯の「得」としてあるところに、三昧についても陀羅尼についても、逮とか、逮得とか、逮致、逮成、または獲致とか、いふことばの用ゐてあるばあひもあるが、その意義はこゝに考へたことと同じであらう。三昧についていふと、或る三昧の修行をしてその三昧に入ることができるようになつたといふのではあるまい。三昧を獲得逮致した事情が羅什譯のとは同じように語られてゐることからさう考へられる。なほ三昧と陀羅尼とを連稱しまたは同じようにあつかつてあることは、ほかのいろいろの經にその例が多い。）

ところで、かういふようにしてその能力の得られる三昧にいろ／＼あるといふのは、どういふことであらうか。それは三昧の境地そのものがちがふのか、それに入る能力にちがひがあるのか、たゞしは三昧の効果またはたらきがちがふのか、或はまたそのどれにもちがひがあるのか。法華經に名ばかり記してあるいろ／＼の三昧については、そのことが全くわからぬが、たまにはそれを考へるいくらかのてがかりのあることもある。序品に、佛が無量義處三昧に入つたのは無量義經を説いた時のことであるとしてあるが、それによると、この三昧と經との間に何等かの關係があるように考へられてゐることが知られるので、それはすなはちこの名の三昧の境地そのものに何等かの特殊の内容があるとせられたことを示すものではあるまいか。次には、三昧の効果またはたらきの説いてあるものも、一つ二つはある。妙音菩薩品に、この菩薩が衆生を救済するためにさまざまの身を現はして法華經を説いたのは、現一切色身三昧に住してゐたためである、と説いてあるのを見ると、この名は三

味の効果またははたらきによつてつけられたものであることが知られるので、その効果はすなはち、菩薩がこの三昧に住することによつて衆生の前にさま／＼の身を現はすことなのである。三昧そのものは身も心も動かぬ寂靜の境地であるが、そのはたらきとしてかういふことがあるといふのである。藥王菩薩品にも同じ三昧の名が見えてゐるが、そこにはかういふはたらきのあることは説いてない。しかしその三昧を得た菩薩の名を一切衆生喜見としてゐるのは、やはりこの三昧のはたらきが上に記したように考へられてゐることを、示すものであらう。普賢品に普賢が人の前にその身をあらはすことを「以一切衆生所喜見、現其人前、」と書いてあることと、ひきあはせて見るべきである。次には妙莊嚴王品に、離諸惡趣三昧に通達してゐる淨藏が一切衆生にもろ／＼の惡趣を離れさせようとしたとあるのも、やはり同じように解せられるので、これはたぶん、菩薩がこの三昧に住することによつて、その効果として一切衆生が惡趣から離れることができる、といふのであらう。これらはわづか一つ二つの例ではあるが、かういふことが考へられとすれば、いろ／＼の三昧には、それ／＼に特殊の効果があらはたらきがあるとせられたので、さまざまにちがつた三昧があるといふことのいはれてゐる一つの事情は、そこにあるようにおしはかれる。もつとも、このように三昧のはたらきの説いてゐるのは、特殊の名のついてゐるものには限らないのであつて、例へば妙音菩薩品に、この菩薩が三昧に入り、その三昧の力を以て、限りなく遠い東方の佛の國から、三昧に住したまふで、この世界のシヤカムニのところに来たとしてゐる（この三昧はこの品の全體の思想から考へると、現一切色身三昧をさしてゐるようでもあるが、明かでない）。佛が無量義處三昧に入ると天から花がふり世界が六種に震動し、佛の眉間の白毫から光が出て東の方の萬八千の世界を照らしその佛やその説法のありさまなどが明かに見えたといふのも、やはりこの三昧のはたらきとせられてゐるようであるが、これはこの名の三昧のみのことではなくして、ほかの經においてはほかの三昧についてもいはれてゐることであるから、佛の住する三昧のすべてのはたらきとすべきものである。

三昧のかういふ効果もしくははたらきは、いづれもいはゆる神變のことは不可思議のことであるから、三昧には一般にそのようなはたらきがあり効果があると考へられてゐることが、それによつて知られるが、同じく神異であり不可思議であるにしても、そのことがらは三昧によつてそれ／＼ちがつてゐるものとせられ、そこから／＼の三昧があるように説かれることになつたのであらう。しかし法華經に名の記されてゐる三昧だけについていつても、それらの名の三昧そのものの内容なりそのはたらきなりが、一つ／＼具體的に考へられてゐるかどうかは疑はしい。それ／＼にちがつた名がつけられたとすれば、それらはいづれも何等かの點で特殊性をもつてゐるものとせられたではあらうが、その特殊性が具體的に考へられてゐるにはかぎるまい。妙音菩薩品のように多くの三昧の名が並べて記されてゐるばあひには、たゞ名のみが作られてゐるとすべきものようである。特殊性が具體的に與へられ、さうしてそれにその特殊性を示す名のつけられたものがあるために、名のみをつけてさういふ三昧があるように語つたまでであると思はれるのである。名のみが記されてゐる法華三昧のごときも、またその例ではあるまいか。妙音菩薩品を佛が説いた時に華嚴菩薩が法華三昧を得たとあるが、藥王菩薩品には、法華經を聞いた力のゆゑに藥王菩薩が現一切色身三昧を得たといつてゐるから、法華經を説きまた聞くことと法華三昧との間に特殊の關係があるらしくも見えず、さうしてその外には法華三昧について何の説明もしていないことを、考ふべきである。なほ法華三昧の名は、後から法華經につけ加へられた妙音菩薩品と妙莊嚴王品とに見えるのみであつて、この經の前からあつた諸品には全く記されてゐないが、法華三昧ばかりでなく、そのほかの／＼の名をもつてゐる三昧も、序品の無量義處三昧のほかは、どれもみな後からつけ加へられた諸品にのみある。これはもと／＼この經の主旨が法華經を聞き讀み受持し修行することの功德を説くところにあるために、前からあつた諸品は、その精神で書かれてゐるからのことか、とおしはかられる。三昧を得ること、陀羅尼を得ることと共に、法華經の功德として説き得られないではなく、現に、上に述べたごとく、妙音菩薩品と妙莊嚴

王品とは、さういふふうについてあるところがあるが、前からあつた諸品は、もつと直接の功德を説かうとしたのではあるまいか。

これまで見て來たのは、智顗の法華三昧懺儀を考へるについて、法華經において三昧がどういふものとして記されてゐるか、といふことであるが、いふまでもなく、三昧のことはどの經典にも見えてゐるので、智顗が四種三昧をいふにも、文殊師利所説般若經によつて常坐三昧を、般舟三昧經によつて常行三昧を、説いてゐる。そこで、いはゆる大乘のおもな經典において三昧といふことがどうとりあつかはれてゐるかを、一おうかいまみておくのも、智顗の考を知るについていくらかのやくにたたうと思はれる。或る經典に三昧のことの説いてあるのは、その經典の全體の思想との關聯においてであるから、いろいろの經典から三昧についての説だけをとり出してそれを見るといふことは、嚴密にいふと正しい考へかたではあるまいが、どの經典にも共通な點もあるから、その點をざつと見ておくのも、法華經の三昧のとりあつかひかたとてらしあはせる意味で、全くむだなことではあるまい。さて、三昧にそれ／＼名のついてゐるいろいろのものがあるといふことは、例へば般若經や華嚴經のような經典にも到るところに見えてゐるし、觀佛三昧海經のような特に三昧のことを説いた經にも記してあるが、名を擧げずに多くの三昧があるといふことをいつたものも、またさまざまの經にあり、甚しきは百萬三昧とか、百萬阿僧祇三昧とか、または無量三昧とか、微塵數三昧とか、いふことさへいはれてゐる。ところで、名の記されてゐるいろいろの三昧には、それ／＼の効果もしくははたらきの説いてあるばあひもあるので、例へば涅槃經の聖行品、摩訶般若波羅蜜經（羅什譯）すなはちいはゆる大品般若の問乘品（放光般若の問摩訶衍品、光讚般若の三昧品）、または華嚴經（六十華嚴）の賢旨品、十廻向品、入法界品、などにもそれが見えてゐるし、また特殊の三昧を説いた經典、例へば首楞嚴三昧經などのようなものにも、それがある。或はまた多くの三昧のうちには特にそのはたらきの大きいもの、従つてまた價值の高いもの、のあることが説かれ

てゐるばあひもある。涅槃經の聖行品には、二十五三昧の名を擧げてそれを諸三昧の王であるとし、また高貴德王菩薩品には、金剛三昧を「於諸三昧、爲最第一、……一切三昧、悉來歸屬、」といつてあり、大品般若の序品（放光般若の放光品）には、三昧王三昧を「一切三昧、悉入其中、」と説き、華嚴經の賢首品明法品などには、一つの三昧から微塵數の三昧が生じまた一つの三昧において無量の三昧に入ることが説いてあり、入法界品には、普現拾得三昧や獅子奮迅三昧などについて、これらの三昧を得るとそれによつて多くの三昧が得られるといつてある。觀佛三昧海經に、觀佛三昧を首楞嚴等諸大三昧、始出生處、と説き、首楞嚴三昧經に、この三昧にあらゆるはたらきがあることを説くと共に「一切三昧、皆悉隨從、」といつてあるのも、これらと同じである。或はまた三昧の基礎的のものとして考へられてゐる空三昧、無相三昧、無作（無願）三昧、のいはゆる三三昧が、華嚴經の十地品では、それ／＼に多くの三昧を含んでゐるごとく、或は多くの三昧に分れてゐるごとく、説いてあるような例もある。

さて、このように説かれてゐる多くの三昧の名と、そのはたらきと、或る三昧とそのほかの多くの三昧との關係と、によつて考へると、これらの三昧は、よし三昧の境地が實際に體驗せられるものであるとするにしても、體驗せられた境地にいろいろあるその種々の境地を體驗によつて示したのではなく、思想の上で構成せられたものであることが、あのづから知られる。さもなくば、それ／＼にちがつてゐながらそのちがひが實ははつきりしてゐず、たゞちがつた名によつてそれが暗示せられるような、または名によつて強ひてそのはたらきの説明せられてゐるような、三昧の境地がこれほど多くあること、また涅槃經に説いてあることを一つの例としていふと、その二十五三昧の名に、無垢三昧、無退三昧、心樂三昧、歡喜三昧、とかいふような、三昧の境地とせられてゐるいろ／＼の側面によつて、または日光三昧、月光三昧、青色三昧、赤色三昧、とかいふような譬喩によつて、つけられたものがあり、さうしてその二十五三昧がそれ／＼二十五有の一つづつを斷つはたらきをもつ

とせられてゐると共に、別に金剛三昧（これも譬喩による名である）が一切の諸法を破すといはれてゐるようなこと、のありやうがない。大品般若に擧げてあるやうにそれ／＼ちがつたはたらきのある三昧が百八あるといふのも、また同じ理由からであるが、百萬の三昧とか無量の三昧とかいふに至つては、なほさらである。

なほかういふ三昧は、例へば華嚴經の入法界品に、菩薩不可思議三昧を精進堅固に修習するとか、文殊師利所說般若經に、一行三昧を常勤精進して學習するとか、いつてあるやうに、三昧そのことの習練によつて得られるやうに説いてあるばあひもあるが、それはむしろ稀な例であつて、同じく修練によつて得られるとするにしても、例へば大品般若の勸學品に、菩薩は般若波羅蜜を學ぶことによつて首楞嚴三昧をはじめとしてそのほかのいろ／＼の三昧が得られると説いてあるし、文殊師利所說般若經にも、一行三昧に入るには般若波羅蜜を學ばねばならぬとしてあり、また般舟三昧經に、この三昧を得る法として三つの四事を擧げ（文殊師利問經にも定寶を得る法としてこれに似たことが説いてあるが、たゞ常行でなくして常坐である點はちがつてゐる）、觀佛三昧海經に念佛三昧を成願するについての五因縁を説き、集一經福德三昧經（等集衆德三昧經）に三昧を成就するに十法があるといつてあるやうに、三昧そのことの習練によるとはしてないばあひがある。（般若波羅蜜の學習によることを説いてゐるのは、般若經だからのことでもあらうが、華嚴經の入法界品にも同じことがいつてある。首楞嚴三昧經には十地の菩薩でなくてはこの三昧は得られないとしてあるが、特に六波羅蜜の果報であることが説かれてゐる。）のみならず、例へば華嚴經の盧舍那品には、佛の無量の自在功德を見た善根因縁のために十種の三昧を得たことが記してあり、また入法界品に説いてあるごとく、經をきいたがために三昧が得られるとしたり、或る菩薩のところに來てそれにあひそれを語るものはいろいろの三昧が得られるとしたり、或る菩薩の得た三昧の力によつて多くの菩薩が三昧を得たとか、世尊が獅子奮迅三昧に入つたためにもろ／＼の菩薩がさま／＼の三昧を得たとか、説かれたりしてもゐる。或はまた、もろ／＼の佛が目の前にあらは

れて説法すると須臾の間に首楞嚴三昧が得られるといふ觀佛三昧海經の説、三昧を説いた經を讀誦受持書寫することによつてその三昧が得られるとしてある慧印三昧經や菩薩念佛三昧經の説、などもある。要するに、三昧の境地に入ることは、そのための特殊の修行習練をしなくともできるように説かれてゐるばかり多く、三昧についていつてあることの大部分がそれであるので、一つの三昧を得ればそれによつてそのほかの多くの三昧が得られるといふのも、かういふ考へかたから出たことであらう。

ところが、かういふ三昧は、實は、無上菩提に達するための修行の方法の一つとしての身心不動の特殊の境地ではなく空で、佛もしくは菩薩の行ふ道のすべてを含むものであり、或はむしろ佛や菩薩の境地そのものであるように見える。般若波羅蜜またはそれを含む六波羅蜜を修行することによつて、または十法などを行ふことによつて、三昧が得られるといふのは、そのことを示すものではあるまいか。涅槃經の序品に、普通には三三昧の名とせられてゐる空、無相、無願、を法と稱し、「以無相無願之法、常修其心」といつてあつたり、迦葉品に「諸三昧門、方便三昧、無量無邊、如是等法、是佛佛性」といひ、憍陳如品に「第一義諦、亦名第一義空、亦名首楞嚴三昧、……平等三昧、亦名大慈大悲」といつてあつたりするのも、また大品般若の相行品（放光般若の空行品、光讚般若の行品）に「般若波羅蜜、卽是三昧、三昧卽是般若波羅蜜、菩薩卽是般若波羅蜜及三昧、般若波羅蜜及三昧卽是菩薩」といつてあるのも、かう考へることによつてはじめてその意義がわかるようである。菩薩は三昧に入るとも住するともまた三昧を得たとも思はず、すべて三昧想が無い、それは、すべての法が空であり不可得であり、従つて三昧もまたさうだからである、といふように大品般若のこの品などに説いてあるのは、空を説く般若經の特殊の思想から來たことではあらうが、また三昧そのものを佛または菩薩の境地そのものとしたためでもあるらしい。修行の方法の一つとしての三昧については、かういふことはいはれなからう。文殊師利所説般若經に不思議三昧のことを説いて、この三昧相

は一切衆生相と同じであり、一切衆生がこの三昧を成就してゐる、もと／＼心相は無いからだ、といつてゐるのは、説きかたはちがふが、やはり同じことをいつたのであらう。このばあひの衆生相はすなはち佛の境地、菩薩の境地、として解すべきもののようだからである。或はまた首楞嚴三昧經に「所有三昧門、禪定門、辯才門、解脫門、陀羅尼門、神通門、是諸法門、悉皆攝在首楞嚴三昧、」と説いてゐるのも、この三昧が佛の道のすべてであるようにいひなしたものと解せられる。涅槃經に説いてゐるように、金剛三昧が一切の諸法を破すとか、大品般若の相行品にあるように、菩薩の行ふ三昧によつて無上菩提が得られるとか、文殊師利所説般若經に見えてゐるように、菩提自在三昧を得れば一切の甚深佛法が明らめられるとか、または華嚴經のあるこちについてゐるように、三昧によつて佛の智慧が得られるとか、いふのは、いろ／＼の三昧を佛の境地に達するための方法としたものではあるが、しかしそれと共に、その方法が三昧のみであるように説きなされてゐ、しかもその三昧が上に述べたようにして得られるものであることになつてゐるところに、意味があるので、その點から見ると、いはゆる三昧は佛の境地に達する方法の一つとして修行するものではないことになる。三昧が結伽趺坐して身心不動のありさまに入つた特殊の境地として説いてゐるところも、いろ／＼の經にあるので、華嚴經の入法界品に「三昧正受、滅出入息、身安不動、寂然無覺、」といつてゐるようなのがその一つの例であるが、これは、三昧の境地に入るには特殊の修行習練がいるようにいつてゐるばあひのあることと共に、三昧のもとの意義が保たれてゐることを示すものである。しかし多くの經に説いてゐるいろ／＼の三昧の性質は、それとはちがつてゐる。

もつともこれについては、佛の住する三昧および菩薩の行ふ三昧と、新に佛の道に入るための修行の方法の一つとしての三昧によつて、説きかたがちがふ、といふ一面のあるらしいことも考へられる。三昧に入るのは、もと／＼修行の方法なのであるから、それは結伽趺坐して身心不動の境地になることであり、従つて特に精進して習練しなければならぬことであるか

ら、現に世にあつてさういふ修行をするもの、すなはち衆生といふ稱呼でいひあらはさるべきもの、についていはれてゐる三昧には、實際に行ふべき方法としてそのことが説かれねばならぬが、佛も菩薩も思想上の存在であるから、かれらについていはれてゐる三昧もまた、思想の上で構成せられたものであり、従つて上に述べたようなものとして説かれることになつた、と見られるのである。さうしていろ／＼の經に説いてあるさま／＼の三昧は、多くは菩薩についていはれてゐるのである。もつとも、經典の上ではかうはつきり區別ができてゐるのではなく、衆生とても、佛や菩薩の住する三昧の力によつて、みづから求めずして、三昧が得られることになつてゐるばあひもあり、佛や菩薩の三昧についても、三昧のもとの意義においていはれてゐるばあひも少なくないが、それは、或は佛や菩薩の三昧の効果を強く説き、もしくはさういふ三昧の觀念を衆生のにもおしひろめて説いたのであり、或は佛や菩薩のについても、三昧のもとの意義が説きかたの上にあらはれてゐるのであらう。

ところで、かう考へて來ると、三昧の効果もしくははたらきとして説かれてゐることをも見ておかねばならぬが、それに就いてもまた佛の住する三昧と、菩薩のそれと、衆生のそれと、の三つにわけて考へねばならず、第二のは第一のと第三のとの中間にあるものであつて、或る點では第一のと、また或る點では第三のと同じところがあるが、これは菩薩といふ地位から來ることである。第一に、佛が三昧に住すると、華嚴經の入法界品に見えるごとく、その三昧の力によつてもろ／＼の菩薩がいろいろの三昧を得、また一切の衆生が清淨法を樂む、といふことが説かれてなると共に、どの經にも説いてないものはないように、さま／＼の神變があらはれることになつてゐて、その神變には、佛の身から光明が放たれ、佛の世界の莊嚴が目の前に見え、または三千大千世界を震動させる、といふことが最も多く語られてゐる。觀佛三昧海經にあるように、佛が解脫相三昧に入ると、人々が佛の眞金像を見、無數の化佛が普現色身三昧に入り、無量の佛の世界の莊嚴があらはれるとか、空寂解脫光明王三昧に入ると、その定力の故にもろ／＼の佛が無邊身に化するとか、説かれてゐるようなばあひもある。第二に、菩薩の

住する三昧のことであるが、その効果として、ほかの菩薩または一切衆生がそれによつていろいろの三昧を得るといふこと、一切衆生の惡心惱心などが除かれるといふことが、例へば華嚴經の十廻向品や入法界品などに説いてあるし、さまざまの神變が生じ、十方世界のいろいろの佛やその國土の莊嚴がごとくあらはれる、といふようなことも多くの經に説いてある。さうしてその神變のうちには、例へば首楞嚴三昧經に、この三昧のはたらきを百ヶ條擧げてあり、さうしてそのうちには一切のよろ／＼の世間のうちにおいて自在に變身する、といふようなことがあり、涅槃經には、上にいつた二十五三昧の効果として、三千六千世界の衆生をおのが身の一毛孔のうちにいれたり、化して無量の衆生となつて三千六千世界に充滿させたり生まれないところへ生れたりすることができる、と説いてあるようなばあひもある。かういふ點においては佛の住する三昧のはたらきと同じであるが、それと共に、多くの經にいろいろのいひかたであちこちに説いてあるように、佛としての智慧に達し無上菩提を得る、といふことが説かれ、またあらゆる佛やその世界を見ることができるといふこともいはれてゐるので、この點においては衆生の修する三昧の効果と同じである。

そこで第三に考ふべきは、その衆生の修する三昧であるが、それについては、觀佛三昧海經などに説いてある觀佛三昧または念佛三昧が、その代表的のものとして考へられよう。念佛三昧もまた菩薩の修するものとせられてゐるので、般舟三昧經や菩薩念佛三昧經ではさうなつてゐるし、華嚴經の入法界品に見えてゐる二十一の念佛三昧といふものも、また同じであるが、般舟三昧經では、比丘比丘尼優婆塞優婆夷もそれを得ることができることになつてゐる。この念佛三昧の効果としては、直接には佛を見ることができるとが説かれてゐるので、觀佛三昧海經にはそれを佛現前三昧または觀佛色身三昧ともいふといつてあり、般舟三昧經では經の名がさうなつてゐるので、それを現在佛悉在前立三昧、十方諸佛悉在前立三昧、または思惟諸佛現前三昧、などと譯してある。佛を見るといふことは、上にもしば／＼いつたように、いろいろの經にさまざまの三昧につい

て説いてあり、諸佛現前三昧の名の用ゐられるのも、念佛三昧をさすばあひには限らぬようであつて、首楞嚴三昧經に八地の菩薩は諸佛現前三昧を得てゐるといつてあるのも、その一つの例らしいが、念佛三昧また觀佛三昧は、三昧に入る方法が佛の色身のいろ／＼の相を觀するところにあることから見ても、佛を目の前に見ることがその三昧の本質とせられてゐることが知られる。觀佛三昧海經には、この三昧の中において佛を見るのみならず、三昧を出てからも、また夢のうちにも、行住坐臥の間いつでも佛を見る、といふことが説いてあるが、それは三昧の效果をおしひろめていつたものであつて、諸佛現前三昧のものと意味は、三昧に住してゐる間に佛を見るといふのであらう。たゞ佛を見るといふことは、佛の世界の莊嚴を見ることでもあるし、また佛の説法をきくことがそれに伴つて考へられてゐる。このようにして佛を見ることは、思想的には、菩提に達する一つの道として見られるのであらうが、修行をするものの心理からいふと、それが大なる歡喜であり、法悦であり、従つてそのことがこの三昧を修行する目的となつてゐるのであらう。一般の衆生のために念佛三昧の説かれる理由はこゝにあるものと考へられるので、般舟三昧經の擁護品に、この三昧を得ると世間的のいろ／＼の苦惱が除かれるように説いてあるのも、このことにつれて思ひあはされる（このことについては、なほ後にいふばあひがあらう）。佛を見るといふことについては、文殊師利所説般若經に、佛の法身は相も無く形も無く、有にもあらず無にもあらず、もと／＼目で見ることのできないものであるから、このような實相を觀することがすなはち佛を見ることである、といふことが述べてあるし、禪祕要法經には佛を見るのは生身と法身との二つを見るのであるが、そのどれでもなく假想虛妄より生ずる色像を見ることがあるのは、ほんとうに佛を見るのではない、といふことが説いてある。かういふ考へかたからすれば、觀佛三昧、念佛三昧、によつて見られる佛は、生身の佛であらう。（文殊師利問經にも虚空のごとき佛の法身を見ることがいつてあるが、それと共に相好の具はつてゐる色身の佛を見ることが説いてあつて、その間の關係がはつきりしてゐない。）なほいひそへておくが、上にもいつたことがあ

るように、佛が或る三昧に入ると、菩薩や衆生の前に多くの佛とその國土の莊嚴とがあらはれるといふのは、佛の入つた三昧の力によつて生ずる神通力のはたらきであり、神變のすがたであるが、衆生がみづから修する三昧のうちにおいて佛を見るのは、その修する三昧の効果であるので、その間にちがひがある。菩薩が住する三昧には、この兩面があるように見える。

以上は、いはゆる大乘の經典とせられてゐるいくつかの經において三昧といふことがどう説かれてゐるかを、わづかばかりかいたみただけのものであるので、三昧のいろ／＼のすがたと性質とを詳しく考へたのではないから、考ふべくして考へなかつたことも多いが、これだけでもほどそのおもかげをおもひうかべることができであらう。さうしてそれによつて、次のことが考へられるのではあるまいか。三昧に入ることとはもと／＼修行の一つの方法であつて、心を一つに集中して散亂させないことがその基礎となつてゐるようであり、結伽趺坐して身を動かさないようにするのもそのためらしいが、心を散亂させないのが何のためであるか、また散亂しない心の境地がどういふありさまとせられてゐるかは、實は明かでないので心を一つに集中して何ごとかを思惟するといふのならば、それは慧にかゝはることであり、従つて一つに集中はしてゐるが心は動いてゐるとしなければならず、また身と共に心も動かないありさまであるとするならば、それは思惟するためのことではなく、恍惚たる失神状態に入るような効果を求めてのことらしく考へられ、従つて三昧といふことを重んずるには、何等かの神祕的ともいはばいへるべき思想がその根柢にあるように見える。インドにおけるヨーガの行としての禪定には、かういふ性質があるので、それが佛教にもうけつがれ、いはゆる四禪の初級のものにはそれがあるようにいはれてゐるが、大乘の經典に見える三昧にも、それがかはつた形においてあらはれてゐるものと解せられる。さて三昧に入ることによつて智見が開かれるとか、般若波羅蜜を學ぶことによつて三昧に入ることができるとか、いふのは、この前のほうに關聯したことであつて、それが誇張して説かれると、三昧によつて無上菩提が得られることにもなり、三昧がすなはち佛や菩薩の境界だといはれることにもなつたの

であらう。さうしてさういふ一面においての三昧の意義が思想的に深められると、菩薩が三昧に入るにしても、入ることを意識せず、すべて三昧想が無いとも、不思議三昧相は衆生相と同じだとも、いはれることになる。また佛を見るといふのは、失神状態から生ずる幻視であらうから、後のほうの一つのすがたと解せられる。この幻視を得るためにはいろいろの觀法がいるので、佛を見るためばかりでなく、白骨觀とか不淨觀とかいふのもやはりそれであり、意識して或るすがたを一心に思ひうかべることに習熟すると、意識せずして、すなはち恍惚たる無我の境地において、そのすがたを幻に視るようになる、といふのであらう。かういふ三昧の効果をできるだけ強く説き示さうとするのと、インド人に特有な奔逸な空想がそのためにはたいたのとで、さまざまの三昧が思想の上で構成せられ、佛や菩薩の住するといふ三昧は、その三昧の力によつて菩薩に三昧を得させたり、一切衆生に無上菩提を得させたり、するともせられ、またいろいろの神變が生ずることにもなり、變身したり分身したりして衆生の前にあらはれるともせられたのである。いろいろの名のついた多くの三昧が構成せられたのは、佛やその國土や菩薩が數おほく存在するように語られてゐるのと同じであり、無量の三昧があるといふのも無量の佛や菩薩があるといふのと同じである。

ところで、かう見て來ると、いはゆる三昧は實は三昧ではなくなつてゐるのであるが、おほよそにいふと、それは三昧のものと性質から二つの方向に發展したものとすることができよう。一つは三昧に特殊の思索が加へられたことであり、一つは三昧が宗教化したのである。三昧に入つても三昧想が無いとか佛を見るのは法身を見るのだとかいふのが、特殊の思索が加へられたものであることは、いふまでもあるまい。またみづから修行し習練するのではなく、佛や菩薩によつて與へられるものとせられ、恍惚たる失神状態において佛を見る効果をもつものとせられたのは、宗教化の一面を示すものであり、三昧を與へる佛や菩薩は宗教的意義での神となつたのである。佛や菩薩が三昧に入ることによつて神變をあらはすのも、神としてのはたら

きを示すものといふべきである。しかし佛を見るにしても、生身ではなくして法身を見るのだといふようなのは、それが實相を觀することであるといふ意味においては、却つて三昧のもとと性質がそこに保たれてゐるので、誇張したいひかたではあるが、三昧によつて無上菩提が得られるといふのも、一つの意味においては、やはり同じである。さてこれらのことを法華經の三昧について上に考へたところとてらしあはせて見ると、法華經のには、おもにその宗教化した一面があらはれてゐるものと解せられる。さうしてそれは、法華經そのものの全體の精神とおのづから一致することになるのである。

三昧についてはほゞかういふことが考へられるが、次には、三昧とむすびつけて説かれてゐる懺悔について一ことつけ加へておかねばならぬ。懺悔のことは法華經には見えないが、普賢觀經においても、それにもとづいたらしい智顗の法華三昧懺儀においても、それが大せつなことになつてゐるからである。懺悔によつて罪が除かれるといふことは、いろ／＼の經に説いてあるので、例へば金光明經などにもそれはあるが、三昧、特に佛を見る効果をもつものとしての三昧、にそれが伴ふことになつてゐる例もあるので、觀佛三昧海經もその一つである。この經に懺悔によつて佛の色身を見ることがいつてゐるのは、念佛三昧の三昧力の故に罪が消えることによつて佛が見られる、と説いてゐるのと、いひかたはちがつてゐるようであるが、あとのほうのは、三昧において、または三昧力によつて、佛が見られることをいふのが主旨であるこの經の精神から考へても、また佛を見たために罪が消えるといつてあるところがあちこちにあることを思ひあはせてみても、前のほうのと實は同じことを説いたものらしく、従つて三昧と懺悔とは、同じ効果をもちものとして、互に伴つてゐると考へられたのであらう。文殊師利悔過經といふものがあつて、それは懺悔を説くことが主になつてゐるが、そこにいろ／＼の三昧を得ることがいつてゐるのも、また同じ例であらう。文殊師利問經にも、佛を見ることのできる定寶を得る法として説いてゐることのうちに、懺悔が擧げてある。また禪定のことを説いてある禪祕要法經にも、佛を見るために懺悔をすべきことがくりかへし述べてある。ところ

が、懺悔するには懺悔をきく何ものかがなくてはならず、事實、懺悔は佛に對してすることになつてゐるが、懺悔をきいて罪を赦すのは宗教的意義において神の性質をもつたものではなくてはならぬから、このばあひの佛は神であり、懺悔は宗教的の行ひである。だから、懺悔と結びつけられてゐる三昧は、修行の方法としてのそれではなく、宗教化したそれである。ところが一方では、普賢觀經にあるごとく、諸法の空をさとするのが大懺悔であるといふ考へかたがあり、文殊師利悔過經にもほゞ同じようなことがいつてあるが、これは懺悔の宗教的性質をとり去つて、それに空觀による思索を加へたものである。普賢觀經に、第一義空を思惟すれば生死の罪が除かれる、といつてあるのも、つまりは同じことであらう。さすれば、懺悔についてもまた、もとの、宗教的性質をもつものとしてのそれと、懺悔の本質から離れた思索の加へられたものと、二とほりの説きかたがあるので、それは三昧が二つの方向に發展したのと同じであり、またそれとつながりのあることであらうが、こゝで大ぜつなのは、もと／＼宗教的の行ひである懺悔が三昧に結びつけられるようになったことによつて、三昧の宗教化の一面が著しく目に見えて來た、といふ點である。上に述べたごとく、普賢觀經にはいはゆる大懺悔を三昧に結びつけて説いてはゐないようであるが、これは大懺悔がもと／＼懺悔といふべきものではないからであらう。この經でも六根清淨の懺悔は、それによつて三昧が得られるとしてある。もつとも三昧を説いてある經のどれにも懺悔のことがいつてあるのではなく、般舟三昧經にも、また一行三昧の方法の示してある文殊師利所說般若經にも、それは見えてゐない。これは懺悔のことをいつても三昧を語らない經のあるのと同じであつて、三昧と懺悔とはもと／＼別のことだからであり、この二つを結びつけるほうがむしろ特異な考へかたなのである。

三昧と懺悔とについてこれだけのことを見ておいて、さてもとにかへり、智顗の法華三昧懺儀について上にいつておいた問題を考へよう。この法華三昧懺儀は、勸修第一のはじめに記してあるように、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、のために法華

三昧の修行のしかたを定めたものであつて、菩薩のために法華三昧を得る方法を説いたものではない。佛はいふまでもなく、菩薩の住するものとしてのこの三昧の境地を説明したものでないことは、もとよりである。だから、これは、佛や菩薩に對しては衆生といふべきものの、修行のしかたなのである。さてその修行は何のためであるかといふと、この勸修の章には、普賢の色身を見、シヤカムニとその分身とを見、多寶佛塔を見、十方の佛を見るためであることが、第一に説いてあるが、それと共に、十方のもろ／＼の佛の説法をきくこと、それに通達しそれを受持して忘れぬこと、六根が清淨になり一切の煩惱がなくなること、この身のまゝで菩薩の正位に入ること、佛の境界に入り佛の自在の功德を具へること、菩薩のなかまに入ること、普現色身を得て一念のうちに十方の一切の佛の國にゆくこと、いろ／＼の色身を現じさま／＼の神變をあらはすこと、大光明を放ち法を説き一切の衆生を度すこと、などが説いてあつて、この三昧の修行をするのは、このような効果を求めるためのようについてある。普賢を見、シヤカムニとその分身とを見、多寶佛塔を見、六根清淨を得ることを、ねがふもののために、普賢行を修行することを説いたのが普賢觀經であり、またこの經にはいはゆる大懺悔によつて行者が菩薩の正位に入ることができるとしてあるから、この點では、懺悔はこの經の思想をうけついでゐるのであるが、その普賢行は三昧を修行することではないから、そこに懺悔の説がこの經から離れてゐるところがある。また懺悔の説では、衆生としての行者がこのような法華三昧の修行によつて菩薩や佛を見ることができるとしてあるだけでなく、佛や菩薩の住する三昧のはたらきと同じはたらきがそれによつて得られることになつてゐ、そのみならず、菩薩や佛と同じ神通力を得、神變をあらはし、衆生濟度までもできる、といふのであるから、この三昧によつて菩薩になり佛になり得られることになるのである。これは、法華經はもとよりのこと、普賢觀經にもない考へかたである。もし法華三昧を修することが法華經の修行であるとするならば、それによつて菩薩の地位が得られ佛にもなれるといふのは、法華經の修行によつて無上菩提が得られるとしてある法華經の思想から來てゐる考

のようであるが、すでに述べたごとく、法華經に説いてあるこの經の修行には、三昧のことが含まれてゐないから、この二つを同じように見たのは智顗のほしいまゝな考へかたであり、従つて法華三昧の効果をこのように説くことは、法華經の思想とはかゝはりの無いことである。法華三昧が法華經の修行であるといふことが、すでに法華經の思想ではないのである。たゞ三昧によるといふ點をのけてみれば、普賢を見るといふことだけにおいては、普賢品の説がうけつがれてゐる。普賢觀經の思想でも、普賢を見ることは三昧力のはたらきによるのではなくして、却つて諸佛現前三昧が普賢を見ることと懺悔とによつて得られるのであり、そこに懺悔のことをのけて考へるとこの經が普賢品をうけついでところがある。しかし懺悔では、それが法華三昧の効果となつてゐる。（懺悔でも法華三昧の修行において普賢の力によることが考へられてはゐるが、このことは後にいはう。）なほ普賢觀經に、大乘の經典を誦むことによつて佛の功德が得られ、もろゝの惡が減びて佛の智慧が生ずる、としてあるところがあつて、これもまた、法華經の思想のうけつがれたものであるが、懺悔では、このことも法華三昧の効果となつてゐる。次に十方の佛とその國とを見ることは普賢觀經によつたものであつて、この經では、行者が諸佛現前三昧を得、その三昧力によつてもろゝの佛とその國とを見ることになつてゐる點が、懺悔のよりどころとなつてゐるのである。ただ普賢觀經の諸佛現前三昧が懺悔では法華三昧のこととなつてゐるが、それは智顗がこの二つを同じものと見たからである。また行者が菩薩の正位に入るといふことも、普賢觀經に説かれてゐることであるが、たゞそこでは三昧によるのではなくして、いはゆる大懺悔によつて十方の佛が見られ、その佛たちが行者のために無相法を説き第一義空を説くのを聞くからのこととしてある。普賢觀經にかういふことの説いてあるのは、いはゆる普賢行の行者の求めるところの何であるかをまとめて記してあるこの經のはじめのほうではなくして、それとは別なあとのほうにおいてであるから、たぶんこの經のもとの思想ではあるまいと考へられる。そのいひかたにも、般若經の思想のおもかげが見えるのではなからうか。しかしそれはともかくも

として、普賢觀經の説はかうなつてゐるが、それが懺儀では、法華三昧の效果として記されてゐるのである。

このように、懺儀の思想において法華經から來てゐる點もあり普賢觀經によつたところもありながら、二つの經では三昧のはたらきとして説いてないことを、懺儀では法華三昧の效果として記してあるばあひのあるのは、智顗が法華三昧といふものを立ててその効果の大きいことを説かうとしたからのことと解せられる。さうしてこのことは、この法華三昧によつて行者が佛や菩薩と同じ境界に入り、同じ功德を具へ、同じ神通力を得、同じ神變をあらはし、さうしてそれによつて衆生を度することができる、といふ、法華經にはもとより普賢觀經にも見えないことが、説かれてゐる點において、特に明かである。智顗が行者の修行によつて得られる諸佛現前三昧と、佛または菩薩の住するものとしての現一切色身三昧とを、同じものと考へ、さうしてそれを法華三昧のこととしたのも、またこれがためであるらしい。しかし懺儀の修證相を説いてあるところを見ると、佛や菩薩と同じ境界に入つたり同じ功德を具へたりするようなことは説いてない。少くとも明かには書いてない。こゝでは行者の根機によつて證相を上根中根下根の三つに分けてそれを慧定戒のいはゆる三學にわりあて、さうしてさらにその一つ／＼を上中下の三品に分け、全體で九品の等級があることにしてあるが、そのうちの上根の上品のは、普賢行の效果として普賢觀經に説いてあることを、すなはち普賢を見、シヤカムニヤ多寶佛やそれらの分身や十方の佛を見、六根が清淨になり、大陀羅尼を得、菩薩の正位に入る、といふことを、またその中品のは、法華經の普賢品に説いてあることを、すなはち普賢が行者の前にあらはれ、それによつて三昧および陀羅尼を得る、といふことを、いづれも經のまゝに寫しとり、さうしてそれを、二つの經とはちがつて、禪定のうちでのこと、すなはち三昧においてのこと、として説いてある。たゞ上品について普現色身を得るといふことのつけ加へてゐるのは、佛や菩薩と同じ功德を具へることの一つのしるしとして解せられるようでもあるが、これは普賢觀經には無いことである。これだけのちがひはあるが、そのほかの點では、法華三昧を修する效果、すなはちいはゆる

る證相、の最も高いものであるといふ上根の上品と中品とがかうなつてゐるのを見ると、佛や菩薩と同じような神通力を得たり神變をあらはしたりまたは衆生を濟度したりする効果のあることは、こゝでは考へられてゐないことが知られよう。普現色身を得ること、すなはちさまぐの色身を現じて衆生の前にあらはれること、のいはれてゐるのは、このことが佛や菩薩の住する三昧の効果もしくははたらきとしていろ／＼の經典に説いてあり、特に智顗は法華三昧をこの名を負ふ普現色身三昧、すなはち現一切色身三昧、と同じものとしてゐるからのことであらう。法華三昧の力によつて神通力が得られ神變をあらはすことができるといふのは、上に考へたように、この三昧の効果を極度に押しひろめ極度に強めて説かうとしたからのことではあるが、それはまたいろ／＼の經典に、さまぐの三昧の効果またははたらきとして、そのことの説かれてゐることによつて助けられてゐるらしくおしはかられるので、普現色身が得られるといふのもまたその一つの例なのである。が、それと共にまた懺儀において、普賢品もしくは普賢觀經の思想をうけついで、行者が普賢を見また十方の佛を見るといふことを特に重んじ、それを法華三昧の第一の効果として示してあり、さうして智顗がこのような効果のあることになつてゐる諸佛現前三昧を、普現色身三昧または現一切色身三昧と同じものとし、さうしてそれがすなはち法華三昧であるとしたことも、普現色身を特に上根上品の證相の一つに數へた理由なのであらう。が、これについてもまた般舟三昧經や觀佛三昧海經などに説いてある念佛三昧、すなはち現在佛悉在前立三昧、佛現前三昧、が智顗の思想にはたらいてゐるらしくおしはかられる。普現色身が上根上品のものにおける法華三昧の効果として特に加へられてゐることについては、かう考へられるが、一般に神通力を得たり神變をあらはしたりすることは、證相としては記してなく、また衆生を濟度することも、そこには見えてゐない。普賢觀經の説に従つて行者が菩薩の正位に入るとすれば、これらのことがおのづからそれに伴ふものとして考へ得られるではあらうが、智顗がそこまで考へてこれらのことを勸修の章に考へたのならば、證相を説くばあひにもそれを記しさうなものであつたに、

それが記してないのである。だから、勸修の章にいつてあることと證相として説いてあることは、この點において一致してゐないように見える。この證相を九品にわけて示すといふことは、觀無量壽佛經の九品を學んだものであらうが、上中下の三根のそれを慧定戒の三學にわりあてるのは、むりなことでもあり、ほとんど意味の無いことでもある。上根の上品と中品とのそれ／＼に普賢觀經の説と普賢品のとをあてはめたのも、また同じようにむりなことであり、ふとしを思ひつきにすぎないものであるのみならず、「諸如來祕密之藏、於諸經中、最在其上、一と勸修の章に記してある法華經の説が、普賢觀經のよりも輕いものとしてとりあつかはれてゐるようにさへ感ぜられるほどであるから、それをさほど重く見なくてもよいかもしれぬ。ふとした思ひつきでもと／＼關係の無いことがらをむりに結びつけたりあてはめたりすることは、シナの佛家のものの考へかた佛典のとりあつかひかたの常である。たゞこのばあひに勸修の章と證相を説くところとの間に一致しない點ができてゐるのは、あとのほうのは普賢觀經と普賢品との文字をあてはめたのに、まへのほうのはさうでなく、從つて智顗みづからの考で法華三昧の効果を極度に強めていはうとしたためである、と考へることによつて、それが説明せられるようでもある。

さて法華三昧懺儀を見ると、それは二つの思想から成り立つてゐることが知られる。一つは法華三昧を修行の方法としてあること、一つはそれに宗教的性質を與へてあることである。懺儀の法華三昧は、それに入る能力を佛や菩薩によつて與へられるものではなくして、みづから修行して得べきものである。法華三昧は懺儀に十法の第十として記してある坐禪實相正觀またはそれと同じ意義においての思惟一實境界であり、もしくはそれを本體とするものであるが、それはみづから修しみづから行ふものであるので、證相として行者の根機のちがひによつてその効果に九品の等級があると説いてあるのも、そのことを示すものである。法華經に説いてある諸法の實相を禪定において觀するのが法華三昧であるとしたのであつて、三昧を禪觀としたところに三昧のものと性質が保たれてゐる。こゝには、上に述べたように、普賢觀經に大懺悔として説いてあることがそのま

ま寫しとられてゐるが、經に三昧とも禪觀ともしてないのを、懺悔といふ名を用ゐながら、禪觀のこととしたところに、懺儀の意圖がある。經には、行者が菩薩の正位に入ること、大懺悔によつて佛を見、その見た佛が第一義空を説くのをきくことによつて、得られる、としてあるのを、懺儀では、上根上品の三昧の證相としたのも、そのためである。この三昧において觀することは、一切法の空なること、心を求めても不可得であること、すなはち心無心法不住法といはれてゐることであり、さうして修行一心精進方法に理中修一心として説いてあるように、所作の心と心性とは一つであるが故に、それを觀することによつて「不得心相」といふ境地に達する、といふのであらう。法華經では、諸法の實相はシヤカムニがこの經において説いてきかせたことになつてゐるので、經を讀んでそこに説いてあることの意義を理解するのが經の修行であるようになつてゐるのに、懺儀では、禪觀によつてそれを悟ることにしてあつて、そこにこの禪觀を法華三昧と稱した意味がある。しかしこのような禪觀は慧にかゝはることであり、従つて思惟の力がはたらいてゐなくてはならぬ。これが法華三昧の一つの性質であるが、しかしそれと共にほかの一つの性質もある。

懺儀には、この法華三昧を修する順序として、十法の第三から第九までに三業供養、奉請三寶、讚歎三寶、禮佛、懺悔、行道、誦經、を行ふべきことを定めてあるが、これらは何れも宗教的行ひである。三業供養は身口意の三業によつて三寶を恭敬し敬禮することであるが、奉請三寶においてはシヤカムニをはじめとして法華經にあらはれてゐるものゝ佛と菩薩と、法華經および十方の一切の佛のもつてゐる法と、法華經に見えてゐる佛の弟子および十方の佛の世界の僧とを、道場に奉請し、法華三昧を修するためにその加護を求めることがいはれてゐる。讚歎三寶と禮佛とはそれになぞらへて知られるから、一はこゝにいはいはぬことにする。また懺悔は普賢および一切の佛に對して六根の罪障を懺悔することであり、行道にも三寶に歸依することと多くの佛や法華經の名を唱へることが定めてあり、従つてまた行道の時に行ふ誦經にもそれが伴ふことになつ

てゐる。かういふことは宗教的感情のあらはれとしての儀禮であり、その意味で佛や菩薩は神としての性質をもつことになつてゐるので、佛などと共に天龍八部などの鬼神を奉請することにしてあることから、それは知られる。法も僧も、このばあひには宗教的禮拜の對象となつてゐる。懺悔といふことをとり入れてゐるのも、それが宗教的意義をもつてゐるからのことであつて、それは六根の一々について定めてある懺悔のことばの上にも明かにあらはれてゐる。また懺悔の法を説いたところに附記したかたちになつてゐる勸請、隨喜、廻向、發願、のどれもが宗教的のものであることは、いふまでもない。特に發願といふのが「命終時神不亂、正念直往生安養、」を願ふことであるのは、神としての阿彌陀佛に歸依することをいつたものであるから、これはむしろ法華三昧の修行とは一致しないものであるが、さういふことまで懺儀にはとり入れてゐる。（觀經に説いてあるような觀法は禪定の一種と見られるものであらうが、安養國に往生するのは、禪定の力によつて現身において菩薩の位に入つたり佛の智見を開いたりするのとは、ちがふ。）十法の第一の嚴淨道場のしかたとして、道場には一部の法華經を置かねばならぬが、佛の像などはなくてもよいとしてゐるのは、法華經を奉請して「一切敬禮大乘妙法蓮華經」または「南無妙法蓮華經」と唱へることと共に、法華經を宗教的禮拜歸依の對象とするものであつて、それにはまた、法華經に説いてあるこの經を供養することの儀禮化といふ意味もあらう。

しかし、法華經のこのとりあつかひかたは、それが文字に書かれた書卷であるかぎり、法華經の呪力をこのようにして信奉するといふ意味もあらう。また法華經の讀誦は經に説いてあることの義理を解するためでもあるが、呪術的意義がそれに含まれてゐることもまた考へられるので、經を誦んだことの新しいものは安樂行品だけにしてもよい、とせられてゐることに、また誦經の時の音聲が重くみられ、さうして「運此法音、充滿法界、供養三寶、普施衆生、令入大乘、一實境界、」といつてあることにも、それが示されてゐるらしい。安樂行品だけでもよいといふのは、三昧を修するばあひだからといつてあり、さうし

てそれは、禪定にいひ及ぼしたところがそこにあるためであらうが、さういふところがあるからとて、その一品を誦むことが實際に禪定を修することと關係があるはずもなく、もしあるとすれば、それは經の呪力が坐禪の上に何等かのはたらきをすることであらう。また經の義理を解するのは音聲にかゝはりのあることではあるが、こゝにそれをいつてあるのは、特に音聲が法界に充滿するといふようなことをいつてあるのは、やはり音聲の呪術的效果が考へられてゐるものと解せられる。(こゝの音聲は、意義をあらはすことばとしてのではなくして、たゞ耳にきこえるものとしてのそれであるらしい。インド思想においては音聲といふものに特殊の意義が與へられてゐて、佛教の經典にもそのことが見えてゐるから、これはその思想をうけついでものと考えられる。)なほ三昧の修行が行者のみに關したことではなく、一切衆生のためであるといふことは、奉請三寶についても、懺悔についても、またいはゆる坐禪實相正觀についても、いはれてゐるが、或る行者の修する三昧の功德が一切衆生に及ぶといふのは、やはり三昧の呪術的效果と見なすべきであらう。佛や菩薩の住する三昧力が一切衆生の上にはたらくといふのは、かれらが衆生を濟度する神の性質を與へられてゐるからのことと解せられるが、みづからも衆生のひとりにすぎない行者の修する三昧は、それと同じでないからである。しかしこゝにもまた、行者の修する三昧が佛や菩薩の住するそれと同じものように考へられた、といふ意味が含まれてゐるかもしれない。懺儀においては、このように呪術的な考へかたにもついたしわざが宗教的な思想とその懺禮とに結びついてゐるが、これは法華經にもその例のあるごとく、佛教のあらゆる方面において見られることであつて、智顗の思想にもそれがうけつがれてゐるのである。

さて、これらのことがいはゆる法華三昧を修する過程であるとすれば、三昧そのものはよし上に述べたような性質のものとせられてゐるにせよ、それは宗教的な神の加護によつて、時には呪術の意義も加はることによつて、始めて修することができるのであるから、その意味では禪觀もまた行者みづからの力のみによつてできるものではないことになる。ところで、懺儀の

法華三昧が宗教的意義をもつてゐるといふことは、その證相として説かれてゐることにまたあらはれてゐる。下根の下品の「若得種々靈異好夢、或覺諸根明淨、四大輕利、顏色鮮潔、」といふことがあり、中品のが「於行道時、若坐禪中、忽見種々靈瑞、……身心慶悅、得法喜樂、」とせられ、上品の「於行道及坐禪中、……身心安樂寂靜、……心得法喜、安穩快樂、」があり、また中根については、下品の「喜樂一心、默然寂靜、」中品の「身心安定、……發諸喜樂、」上品の「微妙快樂、寂靜無爲、」が、それ／＼坐禪のうちのこととして説かれてゐる。なほ上根の下品のもしても「於行坐之中、入諸禪定、忽覺身心如雲如影、夢幻不實、」が擧げてある。これらは三昧の境地が恍惚たる失心状態であることを示すものであつて、それが更にすゝむと、上根の中品および上品のとして記されてゐる上に引いたようなことになるが、それらのおもなことは、やはり失神状態において見られる幻視であり、それによつて行者は佛や菩薩の世界に居り、従つて、一時的にせよ、佛や菩薩のなかまに入り、或はむしろみづから佛となり菩薩となつたような歡喜を得るのである。こゝに神祕的な宗教的法悦があるといふのであらう。中品について「於行坐誦念之中、身心寂然、猶如虛空、」といひ、上品のについて「於行坐誦念之中、身心豁然清淨、入深禪定、」と書いてあるが、これは下根や中根の「諸根明淨」とか「寂靜」とかいつてあるのと同じであり、書きかたの上で一層それを強めて、すなはち同じ状態の等級の高いもののように、しただけのことであり、三昧もしくは禪定といふことの性質からいへたのである。これは禪定のうちで自覺せられることではないが、喜樂といふのも慶悅といふのもやはり同じであつて、事實かういふ状態に入ることがあるとすれば、それは定を出てからそれを回想することによつてはじめて知られるはずである。しかしこゝにかう書いてあるのは、さういふ體驗を記したものでなく、たゞかうあるべきものとして思想の上で構成せられたことにすぎない。證相を九品に分けるといふことが、すでにさうである。

なほ本文には、かういふ歡喜快樂のことばかりがいつてあるのではなく、特に三學のうちの慧にあてられてゐる上根のお

いては、下品について「智慧分明、了達諸法、……通達十二部經、隨義解釋、難問無滯、一といひ、中品について「大智慧也」と解釋してある陀羅尼を得ること、すなはち佛の説くところをよく把握し理解し記憶する能力を得ること、をいひ、また上品についても大陀羅尼を得、佛の知見を開くことがいつてあるが、これらは三昧によつて慧が明かにせられるといふ三昧の一面の性質をいひあらはしたものであり、十法の第十である法華三昧の本體を坐禪實相正觀とし思惟一實境界としてあるのも、主としてそれにかゝはることである。従つてまたこれは、三昧において思惟する心のはたらいてゐることを示すものであるから、心も動かないといふ意義での三昧の境地、失神状態において幻視を見、それによる法悅を得るのとは、ちがつたことである。證相を説くばあひには、禪定もしくは三昧の二つの側面がかうして結びつけられてゐるが、どちらが重く見られてゐるかといふと、それは神祕的法悅のほうであり、佛や菩薩を見ることが、書きかたの上から知られるので、「三種正中、或有魔事相似」といつてあるのも、そのためであらう。このように考へて來ると、懺儀のはじめの勸修の章において菩薩や佛を見ることを第一に擧げ、また普現色身を得、菩薩たちのなかまに入り、なほ佛の一切の自在の切徳を具へ、いろ／＼の神變をあらはし、大光明を放ち、法を説き、一切衆生を度する、といふようなことを、法華三昧の効果として説いてあることの意味も、おのづからわからう。十方の佛の説をきき、それに通達しそれを受持して忘れない、といふようなことも、そこに書いてはあるが、これは三昧によつて慧を得るといふ三昧の性質の一面から來たことであつて、上根のものの證相として同じことのいはれてゐると同じ理由からであり、三昧とせられてゐるためにかういふことがいはれてゐるものと解せられるので、法華三昧のおもな意味はそこにあるのではない。これについては、「止觀」に常坐三昧として特に一行三昧のとり出されてゐるのが、文殊師利所說般若にこの三昧について「繫心一佛、專稱名字、……能於一佛、念々相續、即是念中、能見過去未來現在諸佛、」といふことが説いてあるからであるらしいことが、思ひあはされよう。(一行三昧については大品般若の間乘品に

その説明があるが、そこにはかういふことは書いてない。さうして「止観」には文殊説般若によつてこの三昧のことを説いてある。「止観」にはなほ文殊問般若にもよつてゐるように説いてあるが、文殊問般若といふものももし文殊師利問經として傳へられてゐるものであるならば、そこにもやはり佛の名號を一心に念ずるならば餘佛世界のものゝ佛を見ることができると説いてある。たゞしそこには、一行三昧といふ名は用ゐてない。

しかし、事實として、懺儀に説いてあるようないはゆる法華三昧を修行することによつて、このような効果が得られるのであらうか。得たものが事實あるであらうか。智顗みづからこの三昧を修行したとするならば、彼は果してそれによつて佛の一切の功德を具へ、佛と同じ神通力を得、同じく神變をあらはし、普現色身を得て衆生の前にあらはれ、それによつて衆生を濟度したであらうか。もしそれができなかつたならば、法華三昧はたゞ宗教的呪術的行事たるに過ぎないものではなからうか。さうして佛の思想（とかれが考へたもの）は、この三昧によつてではなくして、經に説いてあることによつて知り得た（とかれは考へた）のではなからうか。法華文句や玄義においてかれの説いたことのどこに、三昧によつて得たところがあるであらうか。懺儀に定めてありまた説いてあることに對しては、かういふ疑ひが起るのであるが、これは衆生のひとりとしての行者の修する三昧を佛や菩薩の住するそれと同じものと見、同じ効果があるとしたところから、來るのであつて、上にも述べたように、佛や菩薩も、その住する三昧も、現實にあるもの現實に修せられるのではなく、思想の上で構成せられたものであるから、それにはいかなる力をも與へ、いかなる効果をもはたらきをも與へることができないけれども、行者は現在の衆生のひとりであり、その修する三昧は現實に修行するものであるから、さういふことはできないはずであるのを、どの三昧も同じものとしたために、やはりさういふ効果がありはたらきがあるように、説いたからのである。行者の修する三昧にもし何等かの効果があるとすれば、それはせいゝ失神状態において一種の宗教的法悦を得、または幻觀によつて佛や菩薩

を見ることであらうか。續高僧傳の智顗の傳に、かれが慧思禪師について心觀を修行したことを記し、「顗乃於此山、行法華三昧、……解悟便發、見共思師處靈鷲山七寶淨土、聽佛說法、故思云、非爾弗感、非我莫識、此法華三昧前方便也、一といつてあるのが、考へあはされよう。これが實際あつたことを傳へたものであるかどうかといふような詮索は別のはなしとして、法華三昧の修行者にはかういふことがあり得るように思はれてゐたといふ點に、何ほどかの意味があらう。しかしそれとても、實はむづかしいことであるので、いはゆる法華懺法がたゞの宗教的呪術的懺禮として行はれてゐたことによつても、それは知られよう。

ところが、法華懺法の懺禮化といふことは、智顗の懺儀そのものにおいて、すでに明かにあらはれてゐることであるので、六根懺悔のことばが最もよくそれを示してゐる。ほんとうにおのが罪障を懺悔するならば、行者の日常の生活における罪障についてそれをしなければならず、さうしてさうするばあひには、懺悔の内容は個人的にちがつたものでなくてはならぬから、あのような一定のことばを口に唱へるのは、意味の無いことであり、従つてほんとうの懺悔にはならぬのである。そのほかの三寶を奉請したり讃歎したりすることにも、儀禮的性質があり、行道誦經さへにもやはりそれが認められる。懺禮は宗教的感情のあらはれでもあるし、また懺禮によつてそれが刺戟せられることもあるが、それと共に懺禮がたゞの懺禮となり形のみの懺禮となることも、また懺禮そのものの性質である。法華懺法が懺禮として行はれたことは、後世の事實であつて、その懺禮にあづかるものがそれによつて、すなはち懺禮の與へる感覺的な刺戟によつて、一種の法悅を得ることはあつたらうが、それは禪定に入ることにより、禪定のうちにおいて得られることになつてゐる法悅とは、性質がちがふ。それは宗教的なきぶんではあらうが、さういふきぶんの得られたのは、むしろ懺禮のもつてゐる呪力の効果とすべきものであらう。わが國で行はれた法華懺法は、この懺禮化せられたものの傳へられたのであるらしいが、その稱讃讀誦は（それが外國語であることもてつたつ

て) 一種の聲樂的性質を帯びたものとなり、道場の莊嚴やそこに漂ふ異香の匂ひなどにも助けられて、藝術的空氣がその間に醸成せられ、それによつて日常生活の世界とはかけはなれた佛土のおもかげが現出し、行者の心がそれにつまされるようになるので、そこに特殊の法悦も生ずることになったのであらう。(朝晨偈の一ふしが人々の口ずさみにせられ、後には神樂にとり入れられたのを見ても、懺法の稱讃が聲樂的性質をもつてゐたことはわかる。)

智顗の法華三昧懺儀が何のために定められたかといふことについては、かういふように考へられるが、それは法華經に説いてあることとはひどくちがつたものである。このことについてはすでに上にも考へておいたが、こゝでいつておきたい最も大せつなことは、法華經は經そのものの功德の大きいことを説くところにその精神があり、さういふ功德のあるのは經そのものもつ呪力のためであることになつてゐるので、經を讀誦するの、それを受持し憶念し書寫し供養するの、そのためであり、さういふことをするのが法華經の修行なのであるが、三昧を修することによつて何等かの効果を得ようとするのは、實は法華經そのもののもつてゐる力を殺ぐものであり、従つて法華經の精神にそむくものである。普賢觀經に懺悔がとり入れられ、その懺悔の効果の説いてゐるのが、すでに法華經の力を殺ぐものであるが、智顗は普賢觀經にも説いてない三昧の修行をさせるために、懺儀の法を定めたのであつて、その三昧は十法の第十としての坐禪觀行が本體であり、誦經を含んでゐる第一から第九までは、それをしなくとも三昧に入ることのできるものにとつては、しなくてもよいほどのことになつてゐる點に、法華經はもとより普賢觀經の思想にもそむいてゐるところがある。もつとも、さういふことを定めまたは説きながら、一般のしかたとしては法華經の讀誦を重んじ、また法華經を道場に安置したり、法華經を奉請したり、それを敬禮したり、また經に歸依することを口で唱へることにしたり、してゐる點において、法華經そのものの力を重んじたところがあり、三昧そのものについても、それに宗教的呪術的性質を與へたところに、法華經の精神をうけついでところはあつたが、根本の精神は法華經の

とはちがつてゐることになつてゐるのである。三昧を法華三昧と名づけたことは、一面では法華經を重んじたことがそれによつて示されてゐると共に、さういふ三昧が實は法華經に説いてないものである點に、却つて法華經から離れたところがある。

なほ阿彌陀佛の安養國に往生する發願をすることになつてゐるのも、また法華經の精神とは一致しないものである。阿彌陀佛は西のほうの世界にゐる佛の名として化城喻品に見えてゐるが、これは諸方の佛の一つとしてその名が記されてゐるのみである。たゞ藥王菩薩品には女人が法華經をきいてその經の修行をすれば、壽命がつきると共に阿彌陀佛の安樂世界に往かれるといふことが記してあるが、樂土往生の思想は、壽量品に説いてあるような、シヤカムニの居るところが淨土であり安穩の世界であるといふ考へかたとは、その精神において一致してゐないといはねばならぬ。あとから加へられた藥王菩薩品にのみそれがあり、しかもそれを女人のこととしてゐるのは、たぶんこのためであらう。これは、世間に淨土往生の思想が行はれてゐたために、さういふ往生のできるのもまた法華經をきいたゆゑであるとして、この經の功德を説くために、とり入れられたまでのことであるらしい。しかし、法華經を信奉すると共に淨土往生をねがひ、臨終のばあひに法華經の題目を唱へさせてそれをきくと共に阿彌陀佛の名を稱へた、と傳へられてゐる智顗は、この思想を重く見て、法華三昧の儀禮のうちにその發願のこゝとばをはさみこんだのである。「止觀」に般舟三昧經によつたといふ常行三昧の方法を説いてあるが、經には十方の佛またはその名を念ずることをいひ、その具體的の例として阿彌陀佛またはその名を念ずることを説き、ほかの佛についても同じであるとしてゐるのを、「止觀」では、阿彌陀佛の名で十方の佛のを代表させ、「若唱彌陀、卽是唱十方佛、功德等、但專以彌陀、爲法門主、」と説いてゐるのでも、智顗の思想は知られよう（般舟三昧經には佛の名を念ずるといつてあつて唱へるとはしてないが、「止觀」では念ずると共に唱へることにしてゐる）。般舟三昧經や觀經に説いてゐるように、阿彌陀佛を念願することによつてこの佛のすがたを見るといふことが、法華三昧において佛を見るのと同じである、といふことが、この考を助けたのか

もしれず、觀經に諸佛現前三昧の名の見えることも、それについて思ひあはされるが、懺儀の發願には「往生安養」について「面奉彌陀、值衆聖、修行十地、勝常樂、」といつてあつて、そこに特殊の思想があり、また佛を見ると、それによつて淨土に往生するともいつてはない。が、それはともかくも、懺儀においては、法華經の精神と一致しないところのあるかういふ發願をすることになつてゐる。智顗によつて法華經の修行として致へられた法華三昧には、かういふこともあるのである。

さて、こゝにいつたことは、智顗の法華經のとりあつかひかたがいかにほしいまゝのものであるかを、示すものであるが、法華三昧を四種三昧の一つとしそれを半行半坐三昧とするのが法華經には無い考へかたであるといふことも、またすでに説いた。この四種三昧といふのは、いろ／＼の經に見える三昧を、坐と、行と、この二つを二つの形式で結びつけた半行半坐と、非行非坐との、四つの型にあてはめたものであつて、その型は普通に四句といはれてゐる有と無と亦有亦無と非有非無との思惟の四つの型に似たところのあるものであり、たぶんそれによつて導き出されたことであらうが、常行三昧と半行半坐三昧とが、すでに述べた如く、三昧そのものの性質にそむくものであるのみならず、非行非坐三昧といふのも、實際にはあるべからざるものであり、たゞ思惟の型の一つにあてはめるために、むりにかういふ一種を設けたものと解せられる。「止觀」の本文にもさう解せられる辭句がある。常坐三昧とても同じであつて、實はどの三昧も常坐とすべきものであらう。従つてこれらのいづれにも、それ／＼のもとになつた經の説とは一致しないところが生じてゐる。常坐三昧としてある一行三昧についても、この三昧に入るためにはまづ般若波羅蜜を學ぶべきであるといふ、文殊師利所說般若に説いてあることは、「止觀」には見えず、そのかはり經にはいつてない懺悔のことが説いてある。いろ／＼のことがらを或る型にあてはめることは、これもまた上に述べたように、佛家の考へかたの通例であつて、法華三昧の證相を九品にわけたり、上中下の三根を戒定慧の三學にわりあてたりしたのが、やはりそれであるのみならず、上根の中品と上品とに法華經と普賢觀經との説をそれ／＼あてはめたのも、

やはり同じようなしかなたである。「文句」の法華經の解釋は、全體を通じて同じように、因縁、約教、本迹、觀心、の四つの型にあてはめて一々の辭句の意義を説いたものであつて、そのために、むりな、または意味の無い、附會説が到るところに生じてゐる。佛家の經典のとりあつかひかたのいかなるものであるかについては、別にいふをりがあらうと思ふが、今は、法華三昧についての智顗の考は、法華經の思想にも、精神にも、文字の意義にも、そむいてゐるところのあるものであり、法華經のほしいまゝなりあつかひから來てゐる、といふことを、こゝではいつておかうとするのみである。

さてこれまで考へて來たことは、智顗の思想を智顗の思想として見たのであるが、それにはもとより由來があるので、それはすなはちかれの師であつた慧思の思想である。このことは上に引いた續高僧傳の記載からでも知られるが、その記載の前に「詣慧思禪師、受業心觀、……思……卽示普賢道場、爲說四安樂行」といつてあることも、またそれを示すものである。智顗の法華三昧の修行の規定とそれに關する思想とは、慧思のをうけつぐと共に、かれみづからの構想によつてそれを潤色したものであらう、とおしはかられる。しからば慧思のはどこに由來があるかといふと、續高僧傳の慧思の傳には「發空定、心境廓然、……法華三昧、大乘法門、一念明達、十六特勝、背捨除入、便自通達、不由他悟、」といふことが記してあつて、それによると、法華三昧における悟達の境地は、かれみづから得たものとせられてゐるようである。しかし何等かのしかたで法華三昧と名づけられた禪定を修するといふことは、かれにはじまつたのではないにちがひなく、何ほどの傳承が前からあつたはずである。思惟略要法にも法華三昧の名とその方法とが記してある。しかしそれがどうして法華三昧を名づけられたのか、またそれが法華經に説いてあることとどういふ關係があるとせられたのか、これらのことは明かでなく、法華三昧と並べて諸法實相三昧といふものの記してあることも、法華經の説と法華三昧との關係のはつきりしないことを示すものの方である。この法華三昧と慧思の同じ名のとの間につながりがあるかどうか、また知り難いが、よしあるにしても、慧思のは、かれに獨自なところの多いものであつたのではあるまいか。(一九四五年三月稿)